60th

日新鐘

Anniversary

Vol.26

響け！ 鐘の音　世代を超えて

～心をつなぐ　同窓の輪～

To be continued...

甲府中学・甲府一高 創立139周年 60回 東京同窓会 記念誌

環境への想いをかたちに

HAYANO

真心と確かな技術

株式会社 早野組

ISO 14001 認証取得
ISO 9001 認証取得

本　社■〒400-0807 山梨県甲府市東光寺一丁目4-10
TEL.055-235-1111(代) FAX.055-235-1109
■リニューアル部　TEL.055-232-0200
■環境事業部　TEL.055-232-8686
■早野リバブル　TEL.055-268-3333

■東京支店	東京都八王子市千人町二丁目5-24	TEL(042)667-8800	FAX 667-9497
■中部支店	長野県飯田市上郷飯沼1438-1ﾀﾞﾝ・ｲﾅｶﾞｷ1階	TEL(0265)22-3969	FAX 52-2171
■新宿営業所	東京都新宿区四谷二丁目11ｱｼｽﾄﾋﾞﾙ7階	TEL(03)3352-8700	FAX 3352-8710
■静岡営業所	静岡県掛川市下俣南2-3-20ﾊｲﾂ I 10105号室	TEL(0537)22-1301	FAX 22-1302
■岐阜営業所	岐阜県土岐市土岐津町土岐口2087-1ﾄﾞﾘｰﾑﾏﾝｼｮﾝ1階A号室	TEL(0572)55-2834	FAX 55-0817

URL http://www.hayano.co.jp

山梨縣立
甲府中學校
校歌

作詞：三井甲之
作曲：東京高等音楽學院

一、
我等は日本に生まれたり
神の御代より一系の
皇統戴く我國に
生まれしことのうれしさよ
皇國の槃えは天地と
共に窮りなかるべし

二、
大和島根に山めぐる
甲斐の國あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め軽からず
見よや南に富士ヶ嶺は
皇國の鍋めと聳えたり

三、
大海原の揺りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇國を諸共に
國民皐りて國のため
擁まず萎縮まず牌易がず
進むぞ大和ごころなる

山梨縣立
甲府第一高等學校
校歌

作詞：上条馨
作曲：小松清

一、
甲斐の國　み中に建ちて
古へゆ　雄心つたへ
新しき　世の鑑とし
勉めてむ　この學びやに

二、
日に新た　また日に新た
いや高き　のぞみをもちて
眞なる　理きはめ
勵みなむ　若人われら

三、
聳えたつ　芙蓉のたかね
清きかな　甲斐の山川
もろともに　玉と磨きて
賛くべし　天地の化育

日新鐘に寄せて

東京同窓会 会長
清水 昭（昭和44年卒）

今年の東京同窓会のテーマは「響け！鐘の音 世代を超えてTo be continued…」だ。日新鐘は大正15年より今日まで響き続けている。これも伝統というものだろう。在学中に聴いた日新鐘は、同窓生諸氏の記憶の中にそれぞれの出来事と重なって響いておられると思う。小生には12年前の本同窓会当番幹事長の時に、あの鐘を東京會館ローズルームで皆様とご一緒に聴きたくて学校側に借り出すことを掛け合い、果たせなかった思い出がある。

さて、今年の小田切仁当番幹事長は、野球部員で活躍したと聞いた。応援団員であった私は初対面で打ち解けた。というのも、当時の野球部は3年生が卒業すると部員が足りず、秋の新人戦には応援団員がユニフォームを着てベンチ入りしたり、日々のグランド整備と球拾いの役目も担っていたからだ。

そんな苦労も一気に報われたのが、同級生の望月幸一郎投手、小沢芳博捕手（大会第2号本塁打を記録）等で挑んだ、甲子園大会出場（戦前1回、戦後2回）であった。一回戦で島根県立浜田高校に挑み、延長10回2対1で惜敗したが、一高魂を存分に発揮してくれた。今でも良き思い出であり、ぜひともまた母校4回目の甲子園大会出場と一回戦を突破して全国に校歌斉唱を轟かせて欲しい。

還暦を迎えた我が同窓会が、新たな令和時代にも、世代を超えた交流の場となり、同窓生相互に縦と横の絆を深める機会となることを期待する次第である。

ご挨拶

甲府第一高等学校 校長
小林俊一郎

令和元年度甲府中学・甲府一高東京同窓会が今年も盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。同窓生の皆様には日頃より本校への物心両面にわたるご支援、ご協力を頂き深く感謝いたします。

甲府第一高等学校は、今年創立一三九周年を迎え、来年度は節目となる一四〇周年となります。既に記念事業協賛会が設立され、募金への協力もお願いをしているところであります。

さて、三年前に英語科を改編し探究科が設置され、この三月に一期生が巣立ちました。

昨年度は国公立大学へ延べ一一三名の合格者を出すことができました。一方、九〇%を越える生徒が部活に励み、放送部、新聞部、文学部、弦楽部、美術部、書道部、箏曲部、アカペラ部、山岳部、弓道部、アーチェリー部が全国大会へ、吹奏楽部、演劇部、陸上部、水泳部、空手部が関東大会へ出場しました。

強行遠足は本年九三回を数え、十月十二、十三日に実施します。六年前から同窓生の方々に佐久穂から小諸までの各検印所の運営をお願いし、今回は昭和五十八年～六十三年卒の皆様にお世話になります。

我々教職員一同、今後も時代の変化に対応しながら一高の歴史と伝統を継承し、より一層の進化を期して一丸となって取り組んでまいります。

結びに東京同窓会の皆様の変わらぬご支援、ご協力をお願いするとともに、益々のご発展とご健勝を祈念し、挨拶とさせていただきます。

第60回の節目に

第60回 東京同窓会
幹事長
小田切 仁（昭和56年卒）

本年の当番幹事を担当致しました私ども昭和56年卒組は、総合選抜制で甲府一高に入りました。そのため甲府一高生としての自覚、誇り、伝統への感性が少々希薄ではないかと思われることもあります。

しかし3年間の高校生活の中で『我らこそが真の一高生』との自負が徐々に高まり、卒業を迎えたように記憶しています。それは私どもが学校創立100周年時の卒業生であったことも一因ではあります。

そして進学、就職と故郷を飛び出し、社会人として人生を歩む中で「甲府一高卒」は間違いなくバックボーンになっています。時を経て再び同級生が一堂に会し、協力して同窓会の幹事を務めるということも伝統校のなせる一面と改めて考える次第です。

先輩から後輩へ伝統をつなぐ〝世代間のつながり〟が同窓会の根本であることから本年のテーマを『響け鐘の音！世代を超えて』とし、東京同窓会は今回第60回という節目を迎え、加えて本年は元号が平成から令和に代わるということもあり、開催場所の選定や懇親会のスタイル等私どもなりに考えて参りました。ぜひともお時間の許す限りご参加の皆様方が楽しくご懇親いただくことを祈っております。

最後になりましたが、ご多用の中ご出席いただきましたご来賓ならびに同窓生、『日新鐘』に広告を出稿いただきました皆様そして本日の同窓会開催に際して多大なるご指導をいただいた皆様方に厚く御礼を申し上げ、当番幹事委員長の挨拶と致します。

Contents
ごあいさつ

令和元年　第60回　甲府中学・甲府一高　東京同窓会
記念誌　日新鐘　第26号　目次

●山梨縣立甲府中學校校歌・山梨縣立甲府第一高等學校校歌　1
●ごあいさつ　2
日新鐘に寄せて　東京同窓会会長　清水昭（S44卒）
ご挨拶　甲府第一高等学校校長　小林俊一郎
第60回の節目に　第60回東京同窓会幹事長　小田切仁（S56卒）
●目次　3
●甲府と東京をつないだ先輩 その1　4
東京タワーを設計した「塔博士」内藤多仲博士（M37卒）
早稲田大学 創造理工学部 建築学科　山田眞 教授
●届かなかった甲子園　10
第60回東京同窓会幹事長　小田切仁（S56卒）
●甲府一高 野球部監督　窪田 新 さん（H6卒）インタビュー　13
●今、一高で元気な部活！～運動部系～　14
●今、一高で元気な部活！～文化部系～　16
●甲府と東京をつないだ先輩 その2　18
前東京オリンピック聖火リレーランナー
山本順二さん（S41卒）　茂手木光博さん（S40卒）
●一高の一年　22
●現役一高生への7つの質問！　24
●食に眼覚めるころ　第60回東京同窓会副幹事長　末木博（S56卒）　28
●赤い蝶ネクタイの制服　〃　幹事　及川恵美（S56卒）　30
●甲府と東京をつないだ先輩 その3　32
世界に羽ばたいたジャズドラマー　森山威男さん（S38卒）
●東京で同窓生をつないだ記念誌「日新鐘」　34
●一紅会会長を仰せつかって　一紅会会長　峯川文江（S44卒）　36
●一紅会の去年・今年　一紅会第3代会長　飯田冨美子（S33卒）　36
●〈寄稿〉筋書きのないドラマの中で　37
IAEA事務局長特別補佐官　市川とみ子（S56卒）
●第22回一紅会主催「春の講演会」　38
戦国時代の女性たち～武田氏と女・子ども～
講師／長野県立歴史館館長　笹本正治さん（S45卒）
●広告もくじ　40
●広告　42
●奥付・編集後記　64

竣工時の東京タワー。高層建築の第１号として東京エリアの中に存在感を示している（『内藤多仲博士の業績』）

YAMANASHI TOKYO

甲府と東京をつないだ先輩　その１

東京タワーを設計した「塔博士」内藤多仲 博士（M37卒）

早稲田大学 創造理工学部 建築学科
山田 眞 教授

東京タワーは１９５８年12月23日に開業し、昨年還暦を迎えたことは、マスコミでも大いに取り上げられ、みなさんの耳にも新しいことだろう。

さらに東京タワーは、昨年12月３日、日本デザイン振興会選考の２０１８年度グッドデザイン・ロングライフデザイン賞の栄誉に輝いた。

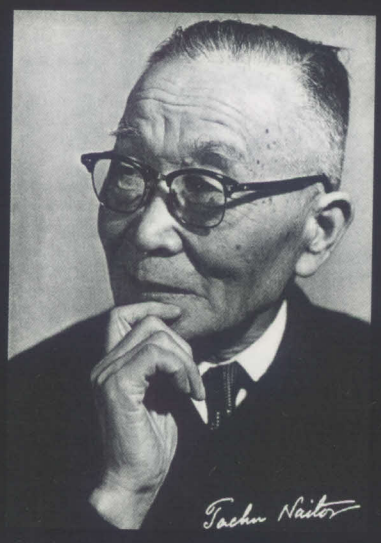
ロングライフデザイン賞は「長年にわたり作り手と使い手、社会との対話の中で醸成され、暮らしや社会の礎となり、未来においてもその役割を担い続けてほしいデザイン、時代と共に変化する価値観を超えて、スタンダードであり続ける力を持ったデザインを顕彰する賞」だという。

昭和の高度成長期から平成を越え、変わり続けてきた東京の中に一人立ち、変わらぬ存在として東京を見守り続け、東京の人々によって見つめ続けられてきた塔は、まさに賞のコンセプトにふさわしいものだ。

そして、東京タワーの設計者である、内藤多仲博士の出身校、甲府中学・甲府一高東京同窓会も、今回第60回の還暦を迎えた。

大阪の通天閣、名古屋テレビ塔、さっぽろテレビ塔など〝タワー６兄弟〟はいずれも「塔博士」と呼ばれた内藤博士の設計で、いずれも60年以上を経過して健在であるが、これらのタワーを支え、また今日の高層建築を支えているのは、内藤博士が創始した「耐震構造」の考え方である。

ここでは、内藤博士がかつて教鞭を執った早稲田大学建築学科の山田眞教授に、改めて内藤博士の生涯と足跡・業績を振り返っていただいた。



内藤多仲の肖像（『内藤多仲博士の業績』）

早稲田大学 建築学科　山田 眞 教授　近影

耐震構造の父、内藤多仲

内藤多仲博士は「塔博士」であるとともに「耐震構造の父」でもある。

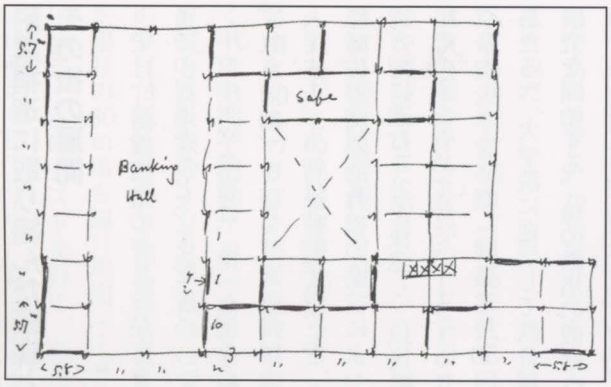
よく知られているように、日本は全地球で発生する地震の約1割のエネルギーを放出する地震大国である。従って日本の建築物は、地震に対して耐えられなければならない。内藤の仕事は、いずれも大正12年（1923）の関東地震がその契機になっている。

現在では耐震建築を造る上で重要な構造要素として「耐震壁」という言葉が当たり前に用いられているが、鉄筋コンクリートなどの架構建築（フレーム構造）において、耐震壁をバランスよく建物の要所に配置し、建物全体として耐震的に造るという考え方を創始して理論化し、かつ実際の設計に適用してその有効性を示したのである。

時代は、日本に鉄骨構造や鉄筋コンクリート構造が導入されて間もない頃であり、明治はじめに洋風建築が輸入されてからの第2揺籃期にあたる。第一次世界大戦後の好景気を迎えて、アメリカ直輸入の工期の短い経済設計がもてはやされていた時代でもある。

地震国日本の実情に合わない設計・施工法をもって造られた建築は、1922年浦賀水道地震に際してかなりの被害を、1923年関東地震では決定的な損害を被った。

内藤が自らの理論を用いて構造設計した日本興業銀行本店、歌舞伎座は関東大震災でほとんど無被害であり、彼の名を一躍有名にし、世界で最初の耐震構造の実現者となった。その考え方は現在も受け継がれているのである。



日本興業銀行本店の構造設計図。内藤の手書きによるもの（『内藤多仲博士の業績』）

日本興業銀行本店。1923 年竣工（意匠 渡辺節建築事務所）（『内藤多仲博士の業績』）

内藤は、早稲田大学定年にあたり卒業生他の寄付を原資に贈られた「内藤博士記念耐震構造研究館」、さらには晩年、日本最初の壁式鉄筋コンクリート造りである自邸および同敷地内にある木造建築の事務所を大学に寄付した。

自邸は博士の生誕100年の記念事業として改装され、現在「早稲田大学内藤多仲博士記念館」となっている。

研究館は、会議室など一般の大学施設としても使用されているが、内藤が残した膨大な図面や計算書など耐震構造に関わる資料の整理・保管・展示場所として使用されている。

筆者は現在、それら資料の整理も行っている。デジタル化時代を迎えて古い文献等がいろいろな機関で保存・集積・公開されるようになるのに伴って、当時の周辺事情に比較的容易にアクセスが可能になり、時代背景や資料間の関係を読み解けるようになりつつある。

内藤邸外観（意匠 木子七郎・協力 今井兼次）。現在は「早稲田大学内藤多仲博士記念館」となっている

内藤記念館（意匠 明石信道）（『内藤多仲博士の業績』）

内藤が学生時代に使用していたノート。
膨大な量の筆記が残っている

山梨県の中巨摩郡に生まれ県の最高学府である甲府中学へ

まず、著書『建築と人生』（鹿島研究所出版会）も参考にしてその生い立ちも追ってみる。

内藤は明治19年（1886）、山梨県中巨摩郡榊村（後に櫛形町、現南アルプス市）曲輪田（くるわだ）に生まれた。

多仲という名前は、父親が「昔、信州松本に多仲と名乗ったエラい豪族が住んでいたそうだ。お前が立派な人間になるように」つけたものだそうだ。

小学校の成績は優秀で、山梨県第一中学校（後に甲府中学、現甲府一高）の試験に首尾良く合格、入学する。ここは当時、山梨県の最高学府だった。

榊村から甲府までは約三里（約12㎞）の距離があり、通うことは無理だったので甲府まで二里ぐらい親戚の家から徒歩で通うことになったが、内藤の母が亡くなったこともあり、途中からは甲府市内から通った。

甲府中学でも内藤はいっそう勉学に励み、非常に成績優秀であったという。

甲府中学5年の内藤（『建築と人生』

耐震構造に取り組んだ経緯とその後の展開

では、耐震構造の考え方が生まれるまでの経過をたどってみよう。

甲府中学卒業後は、第一高等学校（いずれも旧制）を経て、東京帝国大学に入学する。当初は造船学科であったが、恩師佐野利器助教授の助言によって構造方面に進むことを決意し、以後は一筋にその道を究めてゆく。1910年に東京帝国大学を卒業（建築学科30回目にあたる）、大学院に進学して鉄骨構造の研究を開始する。後の鉄塔の設計へとつながる研究の始まりである。同時に、佐藤功一（佐野利器と同期）博士を中心にして創設されたばかりの早稲田大学理工科建築学科の講師を兼ねている。

2年後に大学院を終えて、直ちに26歳で早稲田大学教授に迎えられ、早稲田大学で教鞭をとりながら耐震・耐火建築の実験・研究を続けていくことになる。また、芝浦製作所（現東芝）の嘱託として工場等の実務設計も多数手がけるようになる。この縁も後の塔設計に結びつくことになる。

鉄筋コンクリート造りや鉄骨造りの普及が推し進められていく背景には、1906年サンフランシスコ地震とそれに伴う大火災があった。この被害調査に日本から出向いた中村達太郎・佐野利器両博士らによって、それらの構造の有効性が認められ、日本への導入が図られたからである。以前から内藤は、このサンフランシスコ地震の被害調査報告（アメリカ地質調査所・USGS）を丹念に読んで研究していた。

1917年には念願のアメリカに留学する機会を得て、1年間アメリカ各地を歩いて勉強しているが、日本での課題である耐震的な構造についての手掛かりは得られなかった。意気込みが大きかった分、暗澹たる気持ちで帰国した。

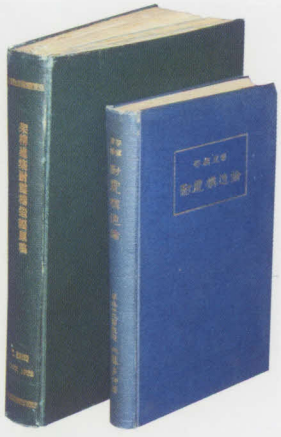
帰国してからも模索を続け、アメリカ移動中に中仕切りを外して使用したトランクが破損したこと、帰国に際し遭遇したアリューシャン沖の嵐で船がデッキや隔壁構造に守られて大丈夫であった経験にヒントを得て、建築構造物を耐震的にするための壁体の利用を着想する。そして、その理論化をはかり、耐震構造法や計算法の開発に取りかかる。理論の内容は次のようなものだ。

建物を破壊するのは架構の大きな変形であり、鉄筋コンクリートの壁でもって要所の変形を抑えるのである。建物の鉛直荷重を支える柱や壁は、鉄筋コンクリートの剛な床で結ばれており、地震の横力（自重に比例する）に対して同一の変形をするので、その際に柱や壁が地震の横力を剛性に応じて分担する（強い構造が大きな力に対抗）という横力分布係数の考え方を導入した。その分担力に対して安全なように強度・断面を設計するのである。

ただし、実際の設計は非常に多様であり、施工精度等も考慮して、実用的な計算法にまでまとめている。実際の設計例を含めて『架構建築耐震構造論』と題して、建築雑誌（建築学会誌）に発表した。関東地震の直前である。

翌1924年、この論文により内藤は工学博士の学位を授与される。アメリカ地震学会誌（BSSA，1927）には論文の要約を載せている。それには関東地震の被害状況も併せて紹介されている。壁を耐震要素として計算に取り入れることは、当時のアメリカでも全く考えられていなかった。計算が煩雑でとても設計で実用に供されるとは思われていなかったのである。

現代の耐震理論に至る系譜には、これに振動理論の導入と地震観測に基づく地震動の性質の把握が続くのであるが、以上に述べたように、内藤が耐震構造学の方向性を示した功績は非常に大きく、「耐震構造の父」と呼ばれるゆえんである。

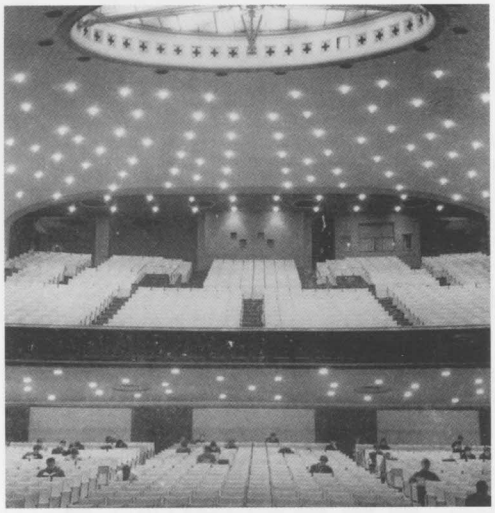

『架構建築耐震構造論』
直筆原稿本（左）と刊行本（右）

建築家との協働

日本興業銀行本店の意匠担当の主任だった村野藤吾は後に独立、内藤の構造とのコンビで、数々の名建築を生み出してゆく（後に文化勲章を受章）。

内藤博士は、関東地震の復興や、戦前の日本の経済発展とともに多数の建築の構造設計に携わっていくが、特に難しい特殊な建物の設計に取り組んでおり、初めて実現した日本興業銀行本店、早稲田大学大隈講堂などにみられる大梁を用いた大空間や、鉄骨溶接、基礎構造の分野なども開拓し、すべての構造分野にわたって日本の建築界をリードしてゆく。

戦後は振動実験による建物健全性の判定など、活躍の場を広げ、設計・施工から、診断・対策におよぶ「建築ドクター」と称された。



大隈講堂内観（意匠 佐藤功一・佐藤武夫）（『内藤多仲博士の業績』）

最初のラジオ塔（NHK愛宕山送信所）の建設ほか

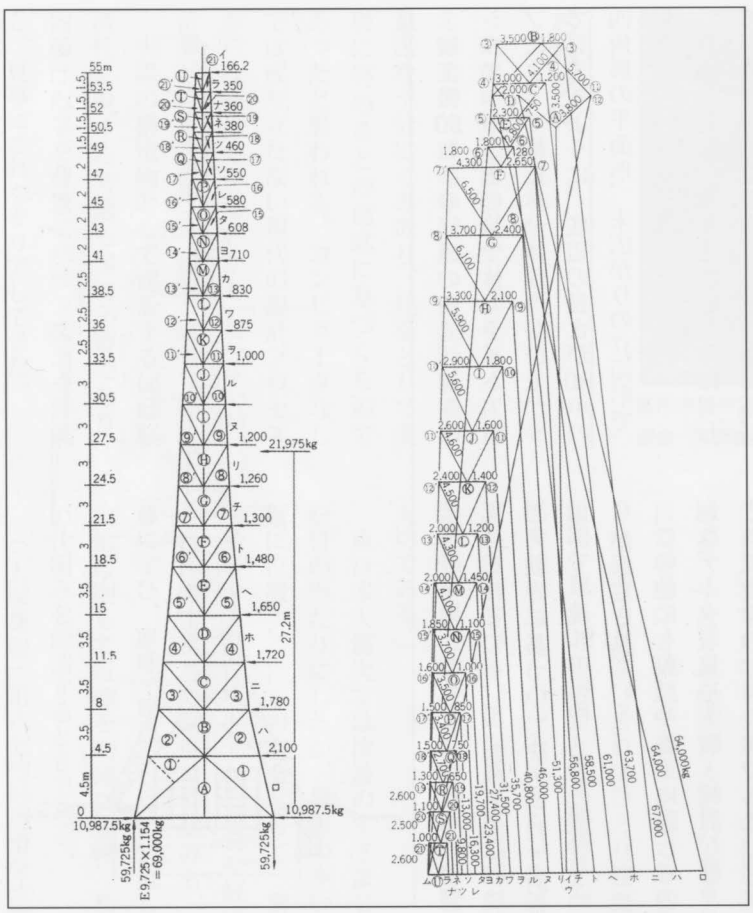
関東地震の際の流言蜚語によって、悲惨な虐殺事件が発生した。その教訓を受けて、情報を正確に伝達できるラジオ放送が1925年から開始されるのである。

芝浦製作所の岩原謙三社長がNHK会長を兼任していたことから設計を依頼された日本最初のラジオ塔、愛宕山（JOKA）タワーは、自立式三角鉄塔2本1組で、中間に張ったアンテナ線から送信する形式のものである。

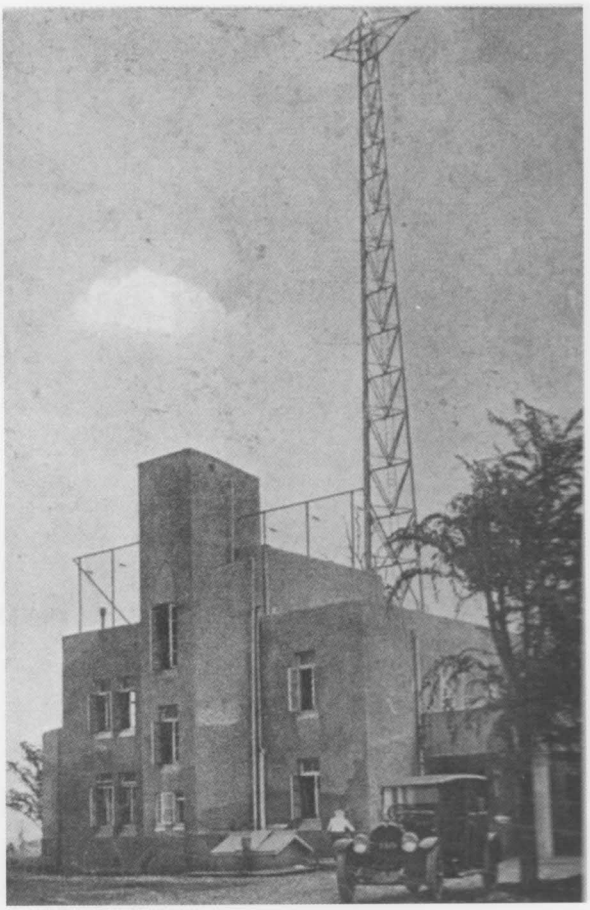
日本は台風の通過位置にあたり、塔状構造物は台風に対する考慮が欠かせない。風の研究もあまりない時代の合理性が要求される建築で、初めての仕事であったことから並々ならぬ苦心が払われた。

塔の高さは45m、早稲田大学の今井兼次とデザインを決め、V字形ウェブ材を連続させた形としている。構造計算には図解法が用いられた。

以後、この形が標準となって、全国各地に60本のラジオ塔が建設されてゆく。その間、昭和7年（1932）に完成した大阪の100m鉄塔は翌々年の室戸台風に遭遇したが故障もなく、また福井の60m塔も福井地震（1948）に耐え、実地テストを経て、鉄塔の設計に確信が持てるようになるのである。



ラジオ塔のクレモナ図（各部材の応力を求めたもの）（『内藤多仲博士の業績』）



愛宕山（JOKA）タワー（『内藤多仲博士の業績』）

最初のテレビ塔、名古屋テレビ塔と通天閣の建設

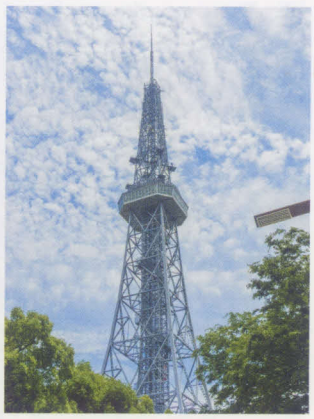
終戦後テレビ時代が到来、東京には3本の塔が林立していたが、名古屋でそれを1本にまとめることになった。テレビアンテナを一方向に合わせれば済むからである。さらに展望台を造って戦後復興の名所にもしたいとの願いに合わせて、高さ180mの塔が形作られていった。

改修された100m道路の真ん中に立つ四角の平面形状で、地盤が良いため基礎は浅く、上部はV字形のトラスで構成され、脚部にはアーチが配されている。90mの位置に展望台、腰部に放送設備室が設置されている。

大阪の通天閣は、大阪市の南、新世界に立つ観光塔であり、1943年に焼失したものを再建した二代目である。戦後復興のシンボルとして商店街の有志が会社を興し再建にこぎ着けたものであり、その逸話はよく知られている。

先代の通天閣のイメージを脱皮したいとの思いがデザインにつながったようであり、八角形の平面をもち、上にいくほど直線的に細くなるが、頭部でくびれてやや太くなる展望台を設置した103mの塔である。名古屋テレビ塔がすでに完成していたので、展望台の高さだけは東洋一にしたいとの思いでその分1m高くなったそうである。

1956年に誕生した、二代目通天閣

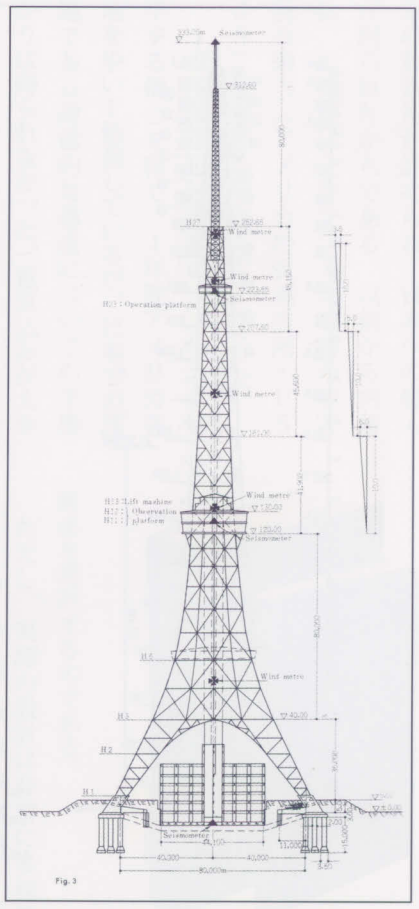

名古屋テレビ塔

世界一の高さを目指した東京タワー

東京でも多くのテレビ局の開局に伴い、各局をまとめ集約したテレビ塔が要望されるようになり、世界一の高さを持つ東京タワーの建設が決定される。

東京タワーは、安全性を保ちながら無駄を省いて優美さを実現した構造合理性の結晶ともいうべき作品である。19カ月という短い工期での完成と経済性も同時に実現したのであった。パリのエッフェル塔の7、300トンの鉄量、27カ月におよぶ工期に比べて、3、600トン、19カ月のそれらは技術の進歩に依っているのである。

ライトアップされた東京タワー


東京タワー断面図（『内藤多仲博士の業績』）

竣工後50数年の経過の中で、初期はシルエット、その後全体のライトアップによって構造体全体が浮かび上がって見えるように、底辺の長さが80mの四角形の平面形、末広がりの立面形で、見るものに安定感を与えている。

立面の姿は、風や地震の荷重に対して最も合理的なモーメント分布に基づいたものであり、これらに抵抗するXやV字形ブレースを配したトラス構造である。塔を支える4本の柱脚が傾いているので、基礎部分では柱脚同士を太い鉄筋により対角線で結んであり、杭基礎を用いて強固な砂礫層の地盤に支持させている。風に対する設計は風洞実験等に基づいて決められており、頂部で風速90m毎秒、また地震力は1Gが想定されている。

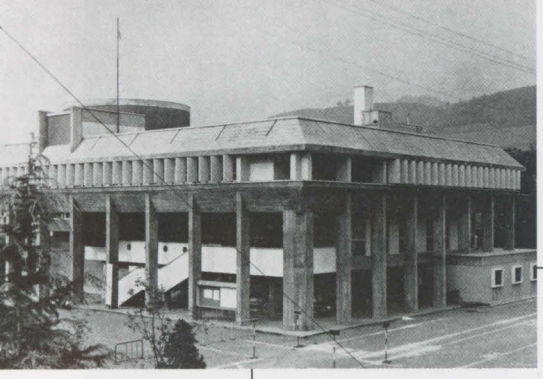
この他にも設計や施工に際しての周到なデータ収集や実験・検討が種々なされてきたのは言うまでもない。とくに最後の80mのアンテナ設置は、下からつり上げて補助骨組みの間を通し、鉛直にしてから押し上げる方法がとられたが、強風のための中断を挟んで大変な作業となった。

故郷でも多くの構造設計

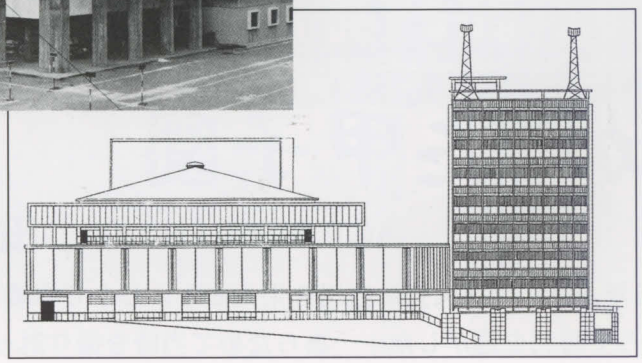
あまり知られてはいないが、内藤は東京タワーを設計した前後の時期、故郷の山梨でも、多くの建築において構造設計をおこなっている。

山梨県庁舎をはじめ、山梨県民大ホールおよび県民会館、山梨青少年文化センターなど、甲府の方々にはきっとおなじみの建物ばかりだろう。

自身の基礎となった少年時代を過ごした甲府には、おそらく内藤も相当な思い入れがあったにちがいない。



山梨青少年文化センター
(『内藤多仲博士の業績』)



山梨県民大ホールおよび県民会館の立面図
(『内藤多仲博士の業績』)

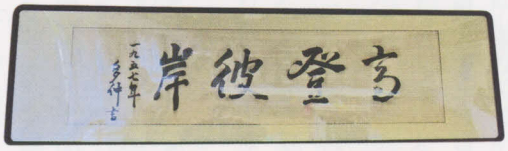
「曲輪田のおじいさん」として

内藤は、そのように非常に多くの仕事をしながらも、郷里櫛形町を決して忘れることはなかった。忙しい中時間を作っては「曲輪田のおじいさん」として、かつての母校である櫛形中学校(旧櫛形町立小笠原中学校を含む4校が統合)でよく講演をしていたという。

あるとき内藤は、蓋をかぶせた箱の上に乗り「蓋がなければこの箱はつぶれる。だが蓋をすればこの通り、わしが乗ってもこわれない」と、実験してみせたという。まさに耐震建築の極意を子ども達に話して聞かせたのだ。

内藤が座右の銘としたのが、「高登彼岸(高く彼岸に登らん)」だ。それは内藤が設計した故郷の櫛形中学校校長室に自筆で掲額されている。「高い理想をめざして、目的地に登りつくよう懸命の努力を惜しむな」という意味で、内藤の人生を表したものと言えるだろう。

昭和39年11月には胸像が櫛形中学校校門を入った正面に建てられた。胸像の除幕式に出席した際の感想を内藤は著書『建築と人生』でこう述べている。



櫛形中学校校長室に掲額されている額(写真提供:櫛形中学校)

―緑の植木を背景に立派な胸像である。全町民の心のこもった贈物とあって、私は面映ゆい気持ちで、十一月十四日の除幕式に出席した。町の人々、学校の教職員、全校学童に迎えられて痛く感動した。遠く過ぎ去った小学校時代が瞼に浮かんで往時を懐かしみ、盛大な除幕式に感謝した。誰かが「毎朝登校する生徒に温顔の先生が私についていらっしゃいと呼びかけているようなポーズですね」と語ってくれたが、生徒諸君の一つの道標に役立ってくれれば、私にとって望外の幸いである。―

櫛形中学校にある内藤多仲博士の銅像(写真提供:櫛形中学校)

おわりに

内藤の構造設計は、力学を基本に据えて合理的であり、かつ意匠設計者の意図を十分にくみ取り、建築として実現に努めるとの信念に基づくものであったと思われる。コンピュータなしでは成り立たない現代の設計プロセスからは想像できないかもしれないが、計算尺による計算で実現してきた。

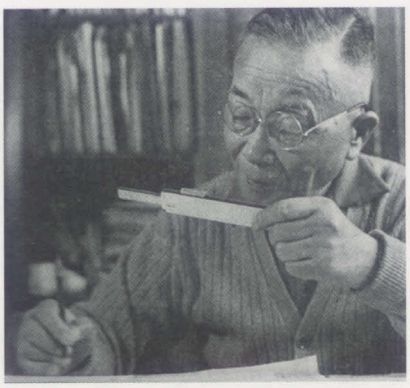
実際の構造物として建設するには経済性に対する考慮も常に必要であり、内藤は力学を背景にバランスよく計画し、見事にこれをクリアしてきた。

最後に、著書『建築と人生』の中から、次の言葉を引用しておきたい。

「……強度計算をするが、この際注意しなければならないことは、計算で出てきた数字だけを信頼するのは危険である。やはり単純化したものを考え、目安をつけて一応チェックしてみることが必要である。これはひとり建築に限らず、あらゆることに共通していることでもあろうが、その過程が複雑であればあるほど、一度振り出しに戻って大づかみに眺めてみるということが大切である。」

東日本大震災では津波のすさまじさを目の当たりにしたが、災害の多い地域に位置する日本の宿命として、構造物やインフラだけでなく、産業や経済、生活への支援等の制度や枠組みも、内藤に学び、原理・原点から見つめ直して、実情に則して目標を的確に定め、新しい仕組みを創造するときである。

(「大塚薬報」第六七四号記事を改編)



計算尺を持つ内藤。76歳頃のものと思われる
(『内藤多仲博士の業績』)

届かなかった甲子園

第60回 東京同窓会 幹事長 **小田切 仁**

一高野球部2年、秋の大会。僕たちは25年ぶりに関東大会に出場を果たした。しかし初戦・宇都宮学院との試合、僕たちはあと一歩のところで勝利を逃がした……あらためて当時を振り返ってみる。

始まった一高野球部の生活

「一高野球部は君を待っている、明日からグランドに来ないか」と一高野球部部長の声が、受話器から突然聞こえてきた。総合選抜制で受験し、合格発表で一高に合格したことを知った僕が、両親に報告しようとまっすぐ家に帰ってきた瞬間にその電話はかかってきた。

甲府北中では3年生になってやっと〝8番キャッチャー〟のレギュラーをもらったくらいだったが、高校でも野球をやろうと考えてはいた。一高が過去3回、甲子園に出場していたことも知っていた。しかし、高校入学まではまだ2週間以上、中学の同級生とも遊びたいし……迷ったあげく、電話があった翌々日に一高のグランドに行ってみた。

なんと、すでに7、8名の同級生が〝あの電話〟で呼び出されていて、一日出遅れた僕にとっては、みんなが先輩づらをしているように見えた。「こいつらっ」と思い、僕の一高野球部の生活が始まった。

当時のチームは3年生3名、2年生6名、それに僕ら1年生。日向正博監督（S45卒）は甲子園経験者で、法政大学でも野球を続けた人だ。石坂稔主将（S54卒）率先して声を出し、妥協せずチームを引っ張る姿は、まさに高校野球の鏡であり、〝一高野球部のにおい〟を僕らは感じた。

きびしい練習の日々

入学前の春休みは、朝7時にグランドに行き、グランド整備の後、午前中は練習、午後は他校と練習試合、試合後また練習。1日の最後には、僕ら1年生は2年生に校歌、応援歌の練習をさせられた。『お前たちは応援歌を歌ってもらえる立場。だから入学前に校歌、応援歌を全部覚えておかなければならないのだ』確かに……午後7時くらいにへとへとで帰宅する生活が続いた。

14、5名入部した同級生は、いつしか8名に。それにマネージャが1人。上級生が少ないため、1年の春の県大会から1年生4名がレギュラーで試合に出ていた。夏の大会は日川高校が優勝し、甲子園に出場した。

そして、秋の大会に向けて、2年生と僕らの新チームで練習が始まった。2年生3人、僕ら1年生8人、11人。夏休みの練習は、酷暑の中で毎日続いた。大学生のOBが熱心に練習の手伝いに来てくれた。

そんな中、センターの五味が練習に来なくなった。心配した僕ら同級生は彼の家に行ってみた。片道15㎞は自転車でも遠く、練習後、毎日この距離を帰る彼の心境を、僕たちは理解した。

僕らの説得により、彼は戻ってきてくれた。もちろん彼は野球がきらいになったわけでなかったのだ。

最上級生として秋の大会に

2年生の夏は2回戦で優勝候補の東海大甲府と対戦し、9回まで同点と善戦したが、最終回でサヨナラ負けを喫した。この試合では、同級生のエース内藤が投打に存在感を際立たせていた。

そして秋。3年生は引退し、僕らが最上級生となる新チームが始動した。退任された日向監督に代わり監督はノックの天才・井上豪先生に、部長は顔を真っ赤にして情熱的に選手に語りかける渡辺明先生（S36卒）になり、コーチには現役の東京六大学審判員だった斉木寛治氏（S27卒・故人）が就任した。

秋の県大会には、僕ら2年生が7人、1年生が8人の計15名の新チームで臨むことになった。

2試合目の甲府西高戦は強行遠足の翌日であったため、僕ら野球部員は韮崎でリタイヤして甲府に帰ってきた。1年の部員の中には悔しくて泣いてるものもいた。この試合では初回で先制し、4回に逆転されたが、僕の高校生活唯一の本塁打で同点にした後は、勢いにのって勝ち越した。

富士河口湖を制して関東大会へ

準決勝は富士河口湖高校戦。これに勝利すれば、県代表として関東大会に出場できる……試合は富士河口湖ペースで序盤に2失点したが、6回に逆転、

決勝戦に進んだ。

決勝戦の甲府商業戦。0―0で迎えた8回、無死1塁。土屋のピッチャーゴロを相手投手があせって2塁に暴投したことに絡めて得点。9回に2死2塁3塁のピンチを招いたが、最後のバッターの3塁ゴロを矢島（1年）が落ち着いてさばいて勝利した。

実に秋の大会25年ぶりの優勝、甲府商業と共に関東大会出場が決まった。

甲府一 25年ぶり優勝

甲府商、無念の零敗

内藤(甲)八回まで

◇決勝（主審松沢、塁審三井、深沢、岡）

甲府一	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
甲府商	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

▽二塁打　五味、小田切

【秋季関東高校野球県予選決勝　甲府一―甲府商】甲府一八回、土屋の投ゴロを依田が二塁へ悪送球する間に、鈴木二塁から生還、先取点を挙げる。（神平加樹）―甲府・緑が丘球場で

いざ関東大会へ！

関東大会でベスト4、つまり2戦勝利すれば、春の選抜甲子園大会への出場がほぼ決まるのである。

関東大会での試合の様子を、『日新鐘』（百周年記念号）から以下に引用する。

―11月3日、応援はバス4台で甲府を後にした。目指すは栃木県宇都宮市、対戦相手は栃木2位宇都宮学園、同日午前5時のことである。バスは7時間かけてようやく敵地へ着き、12時40分試合は開始した。甲府一先行、宇学後攻である。

初回宇学は、甲府一のエース内藤を攻め、2つに四球の右前適時打で2点先取して試合の主導権を握った。甲府一も2回太田の2塁打からリズムをつかみだし3回には小池のヒットに土屋の2塁打、五味の単打、盗塁が続いて、主砲内藤が火を噴きあっさりと同点とした。

リズムをつかんだ甲府一は6回、五味の左前安打の後4番内藤がレフトに豪快な2ランホームランを放ち、逆転に成功した。抱き合って喜ぶ応援席では誰もが「行ける」と思ったに違いない。とにかくこの時、勝利の女神は甲府一に微笑んでいた。

得点は4対3、この9回裏を押さえれば勝利である。応援席では勝利を予想し、翌日の準々決勝戦（対上尾高）の計画が発表されていた。この回を逃げ切り、上尾を破れば甲子園はほぼ実現されるのである。勝利を胸に秘め甲府一は守りについた。

宇学もさすがに地元の代表だけあり、先頭打者がヒットし盗塁を決めて、無死2塁とし、絶好の同点のチャンスを迎えた。ところがこのピンチに内藤、志村は動揺も見せず、2塁ランナーを牽制球で刺した。県大会でも何回かこれでピンチを脱してはいたが、まさかこの場面で決めるとは……。

とにかくあと2人である。勝負には波がある。その波が宇学に傾いたと思った瞬間、打球はヒットとなり、土壇場で甲府一は同点に追いつかれた。

延長10回表、甲府一は主将志村が意地を見せて出塁、土屋が絶妙なバントで送り、一打勝ち越しのチャンスを迎えた。3番五味は、ツーワンから相手エースに屈し三振、4番内藤に期待がかかったが、打球は気迫を欠き、サード正面のゴロだった。チャンスの後にはピンチあり、正にその通りで宇学はヒットに四球で二死ながら1、3塁のサヨナラのチャンスを迎えた。

誰もが祈るようにに見守っていたその時、打球は鋭い金属音を発して太田を襲い、ライトへ抜けた。小池は満身の力を籠めて一塁へ送球した。絶妙の送球だったが無情にも太田の前でワンバウンドした。太田も懸命に停めたが、白球は太田の前にポロっと落ちた。選手も応援団も泣いた。甲子園は夢と散った。―

甲府一、延長10回力尽きる

宇都宮学園勝つ 甲商も農大二に惜敗

関東高校野球

秋季関東高校野球大会は三日、栃木県宇都宮市の県運動公園球場などで開幕した。本県からは甲府一（県予選1位）と甲府商（同2位）が出場、甲府一が地元の宇都宮学園（栃木2位）、甲府商が農大二（群馬1位）とそれぞれ対戦したが、いずれも5―4で逆転負けを喫し、2回戦進出はならなかった。

同日午後零時半から、運動公園本球場で宇都宮学園と対戦した甲府一は2―0と前半リードされながらも三回に同点、六回には内藤の逆転2点本塁打で優位にたったが、守備の乱れと、宇都宮学園の機動力により、小刻みに反撃を許し、結局延長十回サヨナラ負けを喫した。

また午前十一時から、宇都宮市営原球場で農大二と対戦した甲府商は初回、3点を先取、エースがつかまり、七回に同点とされ、最終回には農大二の主砲清水に逆転本塁打を浴びせられ、2回戦進出の望みを断たれた。

▽1回戦

甲府一（山梨1位）	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
宇都宮学園（栃木2位）（延長10回）	2	0	0	0	0	1	1	0	×	5

▽本塁打、内藤▽二塁打　土屋、太田

【評】甲府一はエース内藤の投打にわたる活躍で最終回までリードを続けたが、宇都宮学園の機動力に延長十回に力尽きてしまった。宇都宮学園は初回、ダブルスチールなど足を使った攻撃であっさり2点を先取した。

しかし、甲府一も反撃、三回表、同点に追いつき、六回には無死走者一塁で内藤が宇都宮学園のエース関の初球をジャストミート、打球はライナーで左翼スタンドに突きささり4―2とあっさり逆転した。殊勲の内藤は「初球の速球をねらっていた」と会心の本塁打で、投球も波に乗るかに見えた。

ところが、宇都宮学園は八回、甲府一守備陣の乱れを誘う盗塁で1点、九回にも1点を返し、土壇場で同点に追いついた。延長に入ってからは試合の流れは完全に変わり、延長十回、二死から決勝点を挙げた宇都宮学園がサヨナラ勝ちした。

農大二（群馬1位）	0	0	0	0	0	3	0	2	×	5
甲府商（山梨2位）	3	0	0	0	0	0	0	0	1	4

▽本塁打　清水▽三塁打　清水、小林、依田

【評】甲府商は今大会の優勝候

関会式リハーサルも真剣そのもの。本番を待つばかり　＝甲府緑が丘球場で

夏の大会入場式、各校のプラカード持ちは、一高女子が務めた。

3年生、最後の年

最後の年の3年生。春の大会は、主将志村をケガで欠いたが、何とかベスト4へ進み、山梨で開催された関東大会でも1勝、神奈川代表の東海大相模とも互角に戦った。

しかし、エース内藤の肩痛発症などもあり、3年の夏の大会は、初戦吉田高校に負け、僕たちの高校野球生活は終わった。

当時を振り返って

いま振り返ると、当時、「甲子園」という言葉は、特に誰も口にはしなかった。野球好きのメンバーが毎日ひたすらにボールを追いかけた3年間だったと思う。

そしてよくよく考えてみれば、日ごろは決して仲が良かったとは思えないし、励ましより〝けなし〟のほうが多かった気もする。

ただ長年、先輩たちが培ってきた〝甲府一野球部〟というものに背中を押され続けてきた感覚があった。そして、この素晴らしい校歌を甲子園で歌いたい、この一心はみんなの中に確かにあったはずだ。萩原弓子マネージャーをぜひとも甲子園へ連れていきたいと密かに思っているやつもいたが……

強豪とはお世辞にもいえないが、相手のミスにつけ込むうまさに堅実な守備陣、そしてチームワークの良さは群を抜いていた。野球は9人でやるのでなく、みんなとやるのだといわんばかりにベンチの声も大きい。とにかくチームワークが良かったことは確かだ。

甲府一、東海大相模に健闘

必死の反撃及ばず

内藤、後半は絶妙の投球

◇2回戦
▽第3試合（主審深沢、塁審岡、米山、深山）
甲府一（山梨・4位）
0002100000 3
東海大相模（神奈川・1位）
1113000000× 6
▽三塁打　須山、宮下▽二塁打　長谷川▽併殺　甲府一1、東海1

【春季関東高校野球大会　甲府一―東海大相模】甲府一4回表一死一、三塁、飯野のスリー・バント・スクイズは失敗、同点機を逃がす。三走は小田切、捕手伊島　＝甲府・緑が丘球場で

も絶妙の配球で東海打線を幻惑。敗れたとはいえ互角の戦いを進めた。

0―3とリードされて迎えた四回表甲府一、先頭の五味の中前打、続く内藤の右前打で無死一、三塁の絶好機。主砲・小田切はカウント2―0と追い込まれながら、三球目を右前にはじき返し、五味を迎え入れ反撃の1点目。太田の犠打で手堅く送り、なおも一死二、三塁。ここで、鈴木が右前に渋い適時打。内藤をかえし、1点差に詰め寄った。

しかし、その裏、東海は宮下の三塁打、長谷川の二塁打を含む4安打で3点を挙げ、甲府一の追撃を突き放した。肩の故障で球威の落ちた甲府一・内藤の甘いストレートをうまくねらったところは、さすがに強打を誇るだけのことはある。

その後、甲府一は五回にも七屋を三塁に置き、小田切が右中間へこの日2本目の適時打を放ち1点を加えたが、惜しくも及ばなかった。甲府一はこの日8安打を放ち、機動力のあるハツラツプレー。また内藤も前半打ち込まれたとはいえ、五回以後は、絶妙の配球とき

がんばれ！一高野球部

昨今、私学台頭の高校野球であるが、何年かごとに公立高校が甲子園で彗星のように勝ち上がる年がある。

そんな中に甲府一高が名乗りをあげても、何ら不思議ではない。OBの一人として一高野球部の活躍を毎年祈り続けている。

がんばれ！一高野球部。

第32回秋季関東地区高校野球大会県予選優勝　甲府一高野球部　S 54. 10. 15

勉強についてはあまり胸を張れる程ではなかったが、唯一の〝進学クラス〟の三井は成績を落とすことなく、立派に文武両道を体現した。

当時の野球部のメンバーは、今も毎月の無人会で盛り上がっている。ただし30年以上、会話の中身は変わっていない。

甲府一高野球部監督 窪田新さん（H6卒）インタビュー

私が一高を卒業して38年。今の一高野球部はいかに？というわけで、現在の監督にお時間をつくっていただき、お話をうかがってきた。

今年のチームについて

小田切：グランドに足を踏み入れた直後、練習中の選手全員が私に向かって帽子を取って一礼してくれました。グランドに来るのは実に33年振りくらいなので恥ずかしい感じもあり、懐かしくもありです。昨年の秋の県大会ではベスト8まで進出しました。まずは今年のチームについてお聞かせください。

窪田：はい、タイプの異なる投手がおり、現状では、少ないチャンスをものにして最小限の失点に押さえて勝つという、守備を重視した守り切るタイプのチームです。昨年秋のベスト8ですが、その前の夏の大会で3年生が頑張りました。その勢いをそのまま2年生が引き継ぎ、粘り強く戦った結果と考えております。チーム全体でも内面の気持ちが強い選手が多いと思います。

小田切：練習時間や選手の勧誘などはどうですか。

窪田：練習は16時くらいから始まります。学校の制度上現在は19時完全下校、火曜日は練習休みにしています。現在部員は2学年で23名います。入部した選手はほとんどやめないで野球を続けます。選手の発掘についてですが、中学生の野球の試合をよく視察には行きます。一高に来てもらいたい選手を見つけても合格を確約することはできませんので、指導する先生などを通じて一高を受験してみないかという声かけをすることが精一杯です。

小田切：大学で野球を続ける選手はいますか。また進学状況はどうですか。

窪田：現在は東京六大学で2名（明治、法政）野球を続けています。今年の卒業生の進学状況は国立大、私立大学含めてよく頑張って合格しています。

監督自身について聞きます

小田切：監督の経歴を教えてください。

窪田：野球は小学校3年生から始めました。小学校では当時市内でも有名な監督で厳しい指導でしたが、監督も野球も大好きでした。

小田切：窪田監督が選手時代のチームとその時の甲府一高の様子はどうでしたか。

窪田：そうですね。割と負けず嫌いというか反骨精神旺盛なチームだったと思います。学校の雰囲気としては、いわゆる質実剛健と言いますか、自分の責任は自分で取るという自主性を重んずる校風でした。

小田切：監督就任6年目ということですが母校の監督に就任することをどう思いましたか。

窪田：大学では、野球の指導者になるという自分の強い目標があり、教員を目指しました。甲府一高の野球部の監督になるということには喜びを感じました。しかし同時に選手たちに何か成果を残してやりたいという気持ちのほうが今は強くあります。

小田切：監督をやられてきてご自身の成長というか変化はありましたか、また最も印象にのこっていることは。

窪田：はい、改めてですが、選手各個人は、体力、技量も違うのですが、考え方にも個性的あり、一様に選手を見てはいけないと思い、一人一人の特性を注視するようになりました。最も印象に残っていることと問われますと負けた試合は全部です。

強いチーム作りとは

小田切：甲府一高の野球とはどんなものだと思いますか。

窪田：まず伝統というものは、常々感じるときはあります。選手一人一人が自ら考え、自分の目標に向けて努力する。監督はそのサポート役と考えております。時には厳しいサポートはありますが。自主性を重んずることは一高野球の根底ではないでしょうか。ひいてはそれが教育かと。

小田切：甲子園には手が届くと思いますか。

窪田：正直、現状私学台頭の昨今では実力的には厳しい面もあります。今はベスト8の壁を越えられていません。しかし、この壁を何とか超えたとき甲子園が見てくると考えております。まずはそこに向かって選手と一体となって頑張っています。

小田切：ありがとうございました。監督の謙虚でひた向きな姿勢にOBとして頭が下がります。また日ごろあまり支援ができていないので、今年は特に応援したいと思います。引き続き監督業大変ですが頑張ってください。

窪田監督、小田切仁（インタビュワー）、小田切静雄部長（H6年卒）

今、一高で元気な部活！
～運動部系～

アーチェリー部
顧問／花輪秀剛

本校アーチェリー部は、昭和61年のかいじ国体を契機に創部され、１９８８年のソウルオリンピックに当時一高の３年生であった中込恵子選手が出場したのをはじめ、多数の日本代表選手を輩出してきました。かいじ国体以降、県内唯一のアーチェリー部として競技の普及、競技力向上に努めてきました。

近年、甲府城西高校、東海大甲府高校にもアーチェリー部ができ、放課後に緑が丘スポーツ公園の洋弓場において三校合同練習という形態で日々練習を行っています。「チーム山梨」のスローガンのもと、学校に関係なく、国体をはじめ、インターハイ・関東大会での上位入賞を目標に練習に励んでいます。

今後も本校から日本を代表して活躍する選手を輩出できるよう日々努力して行きたいと思います。今後ともご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

（文　前顧問／吉成謙）

平成30年度　主要大会
●新人体育大会　男子個人
長田連　第2位　矢崎素暖　第5位
●関東選抜大会　男子個人
長田連　第5位
●U－17ナショナルチーム選考会
長田蓮　第5位

テニス部（男女）
顧問／高鳥亮太・永井勇太郎

甲府一高テニス部は、「伝統ある強豪校」を目指し、部長を中心として自主的に活動しています。

学校にはテニス部が専用で使えるコートが一面しかなく、ふだんは女子が使用しているため、男子は緑ヶ丘・国母公園・小瀬スポーツ公園などの公営コートを借りて練習しています。

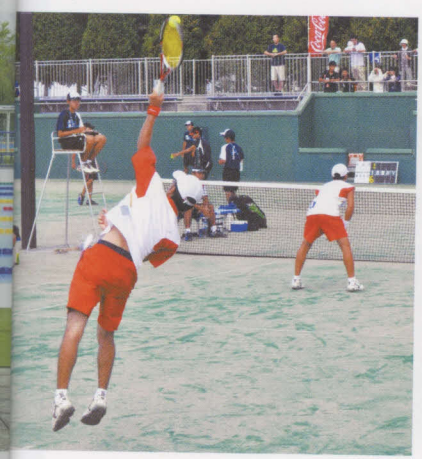
また、テニスコートで練習ができないときは、走り込みや基礎トレーニング、体幹トレーニングをしています。

男子は「勉強も頑張り、男を磨き、みんなで関東・全国に行こう!!」を目標に、「楽をするのではなく苦労をしながら人間的に成長できる」部活動を追究しています。

女子は経験者のほか、高校からテニスを始めた生徒など、様々な経歴を持つ生徒が部に集まっていますが、「各種大会での上位進出」を目指し、練習内容などを自ら考え、一致団結して練習に打ち込んでいます。

今後も甲府一高テニス部は、伝統を受け継ぎながら、主体的な活動を続けていきます。

平成30年度　新人体育大会の成績
●団体戦　第3位（男子・女子）
●個人戦　女子ダブルス　第3位



弓道部

顧問／大塚正敏

昨年度は2年生（現3年生）が主体となり、関東大会男子団体出場、インターハイ男子個人出場、関東個人選抜大会男子2名・女子1名出場、全国選抜大会男子個人出場、東日本大会アベック出場などの実績を上げることができました。

なかでも、男子のインターハイ出場は33年ぶり3度目の快挙であったり、関東個人選抜大会では女子が関東5位に入賞したりなど、とても力をつけてきています。

さらに10月の新人大会では、男女アベックで団体準優勝、個人でも男子が準優勝しました。また、3月の東日本大会では、女子5人制で射道優秀賞、女子3人制で準優勝となりました。

日頃の練習は、「狭い道場」「限られた練習時間」「少ない予算」という厳しい条件の中、部員は健気なほど前向きに練習しています。朝の自主練も積極的に参加し、緑が丘や小瀬の道場をお金を出し合って借りて、矢数をかける努力をしています。

的中させること、大会で勝つことを「目標」に日々の練習に取り組んでいますが、「目的」は、自己の人間的な成長においています。練習試合や遠征、合宿などをとおして、一高の仲間だけでなく、他校の選手や先生方から多くを学ぶことで、3年間で大きく成長しています。

今後は関東大会、インターハイなどの県外大会に向けて、より力をつけると共に、人として成長し、「一高で成長できて良かった」と言って引退・卒業ができるよう、取り組んでいきたいと思います。

水泳部

水泳部部長／2年1組　西口克輝

私たち水泳部は、2年生2人、1年生3人という、少ない人数で活動しています。そのような中、昨年度は、1年生ながらも関東大会へ出場することができました。

私たち2年生2人は昨年度、山梨県代表選手にも選ばれ、県の代表として多くの試合に出場しました。しかし関東大会では、標準タイムを突破することができず、インターハイ・国体へは出場することができず、大変悔しい思いをした1年間でした。

水泳は、1人で泳ぐので個人競技といわれますが、背景には仲間の応援があったり、逆に仲間との衝突があったりします。その意味では、水泳は決して1人で戦っているわけではなく、仲間とともに戦う「団体競技」だといえます。

実際、私たち水泳部の部員は、それぞれ違うスポーツクラブで練習をしていますが、常にお互いを意識し、切磋琢磨して練習に励んでいます。

また一高水泳部は大変歴史が古く、「鶴城水泳クラブ」という歴史あるOB会があって、諸先輩方からもご支援をして頂いています。

今年度はインターハイ出場を目標に頑張って行きたいと思います。皆さん、水泳部の応援をよろしくお願いします。

今、一高で元気な部活！
～文化部系～

ア・カペラ部
顧問／中源博

ア・カペラ部は平成25年に創部し、現在6年目となります。歌で皆を幸せにしたい！をコンセプトに活動をしています。部のスローガンはNo smile, No music. No music, No life. で、音楽と同じくらい笑顔も大切に考えています。

これまでの活動では、地域の行事に出演したり、地元の商店街の歌を作らせていただいて歌ったり、様々な施設に訪問させていただいたりということを中心に行ってきました。

そして同時に、合唱のコンクールにも多く出場してきました。最近では全日本合唱コンクール県大会で金賞、芸術文化祭合唱部門大会では芸術文化祭賞（県代表、全国総合文化祭出場）、山梨ヴォーカルアンサンブルコンテストでは金賞を受賞しました。

また3月に行っている定期演奏会では、金丸前同窓会長様をはじめ多くの御支援をいただき、今年で4回目を迎えることができました。さらに昨年は1時間半を超えるミュージカル「レ・ミゼラブル」を上演するなど、毎年新しいことに挑戦し続けています。

この環境で活動できることへの感謝を忘れず、進化を続ける努力を惜しみません。これからも、同窓会の皆様の応援、ご協力をよろしくお願いします。

書道部
顧問／古屋彰士

書道部では、「生涯に渡って『美しいもの』に敏感でいられる感性」を磨くことを大切にしています。

よって指導者の手本を写す、いわゆる「習字」ではなく、中国や日本の先人が残した古典の中から、自分が「美しい」と感じたものを選び、地道に臨書する活動を中心に取り組んでいます。

「美しい」と感じたものを自分の眼でよく観察し、何度も何度も繰り返し臨書することによって、少しでも先人の息づかいを感じ取ることができたら、と思っています。

ですから、一高書道部は展覧会で賞をとることや、華やかなパフォーマンスを披露することは、あまり重視していません。

平成30年度、一高書道部が、国際高校生選抜書展（毎日新聞社主催）において入選を果たしたり、山梨県高等学校芸術文化祭において芸術文化祭賞（最高賞）や優秀賞（次点）を受賞したり、令和元年度の全国高等学校総合文化祭（佐賀大会）への出場権を得たりしましたのは、単に運が良かったのだろうと思っています。

これからも書道部は、校舎5階の片隅で、ひっそり、そして地道に活動していく所存です。

美術部

顧問／石田泰道

美術部（通称：一美）部員は、オリジナルのツナギに身をくるみ、平日の朝と放課後、各人の目標に向かって切磋琢磨しながら活動しています。

1、2年時は、ものの見方や画面および空間の考え方を学習し、テーマを深め、基本技法の習得を図ります。

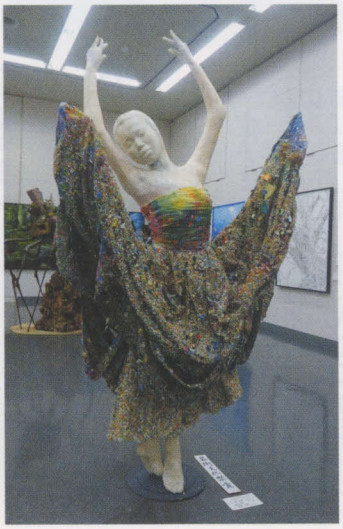
3年時は大人の大会の出品も視野に入れながら卒業後も美術に親しめる資質を養っています。

年間を通じ、各種コンクール（県芸文祭、UTY教育美術展、山人会望月春江賞展、高校生国際美術展など）への参加を通し、多くの受賞を重ねてきました。特に高文連の最大行事でもある芸文祭では毎年、複数の生徒が上位賞を受賞し、10年連続全国大会（全国総合文化祭）出場の快挙を達成しました。

美術に真剣に取り組むと、常に自己と向き合いながら、答えのない理想の世界を追い求めていく、ということになります。精神的にも肉体的にも疲労困憊しがちです。

そのため、ふだんの活動では、合宿や美術館めぐりツアー、各種パーティーイベントを組み込みながら、楽しく活動できる環境作りを心がけています。

美術部は、これからも質の高い活動に取り組んでいきたいと思います。



箏曲部

部長／3年1組　市川琛凪

私たち箏曲部は、日新館で放課後に練習し、週に一度、講師の内田美幸先生にご指導をいただいています。和気藹々とした雰囲気で、部員が集まると笑顔が絶えませんが、練習となると皆姿勢を正し、箏の音色一色となります。

基本となる個人練習では集中力が途切れないように様々な工夫を凝らし、合奏の曲創りでは一人一人の意見を出し合っています。

悩みは部員が増えた分、箏が足りないことで、あちこちからお借りした箏でなんとか活動している状況です。

私達は「全力疾箏（ぜんりょくしっそう）」のモットーを掲げて練習を積み重ね、平成30年11月に行われた山梨県高等学校芸術文化祭では、最高賞である芸術文化祭賞を勝ち取ることができました。そのときの皆の笑顔は、今まで見たどの笑顔よりもまばゆく晴れやかでした。

規定で2年連続の全国総文祭出場ができないため、30年8月に長野で行われた全国総文祭に出場した一高は、次の総文祭代表となれないのが残念ですが、ぜひ次の芸術文化祭でもこの経験を活かし、「芸文祭賞を取って総文祭出場」という目標を実現できるよう努力していきたいと思っています。

YAMANASHI TOKYO

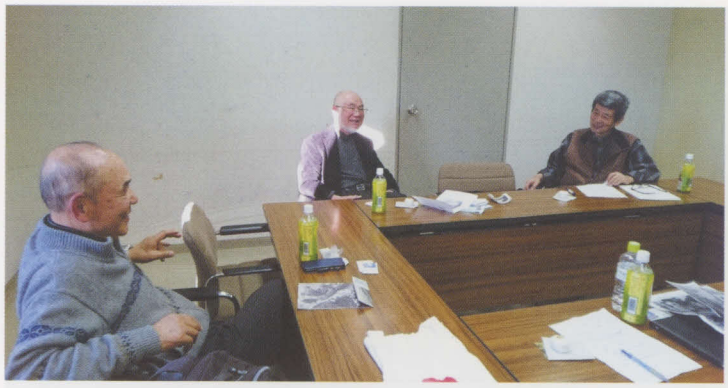
前東京オリンピック聖火リレーランナー
山本順二さん（S41卒）
茂手木光博さん（S40卒）

来年はいよいよ、東京で2回目のオリンピックが開催されます。東日本大震災からの「復興オリンピック」をうたう今回は、聖火リレーは福島からスタートするそうです。

1964年開催の前東京オリンピックでも、聖火リレーランナーが全国を駆けぬけました。ランナー隊はそれぞれ、正走者（聖火を持つ）1名、副走者（予備トーチなどを持つ）2名、随走者20名以内で編成されました。

じつは当時、甲府一高生も聖火リレーランナーを務めました。正走者は山本順二さん（当時二年）、副走者は茂手木光博さん（当時三年）と高柳幸夫さん（当時二年）でしたが、このたび同窓会事務局長の金子寛さんの呼びかけで、山本順二さんと茂手木光博さんが、55年ぶりの再会を果たしました。

金子さん、私たちS56卒も交えて、リラックスした雰囲気で、会話が始まりました。お二人の口から、どんなお話が飛び出すのでしょうか。



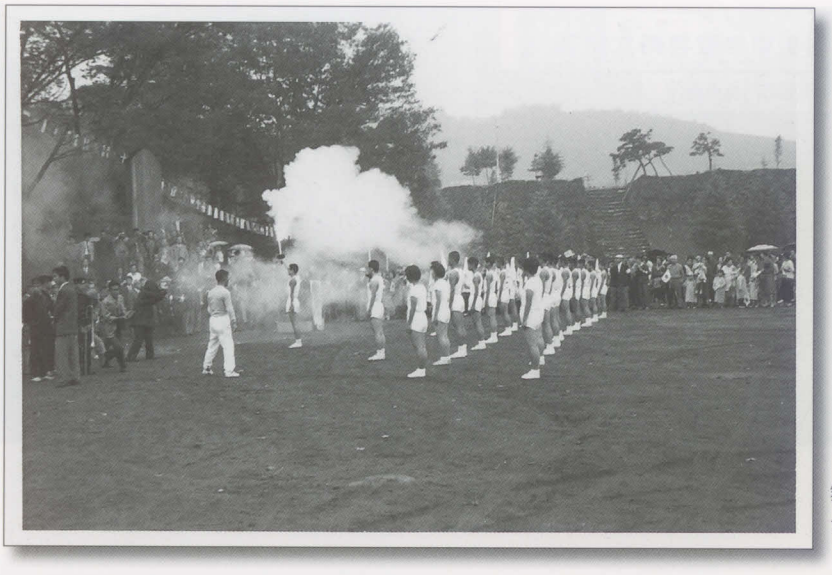
54年ぶりの再会に盛り上がる。左から、茂手木さん（S40年卒）・山本さん（S41年卒）・金子さん（S43年卒）。2019年2月2日（土）甲府市総合市民会館会議室にて。

舞鶴公園からスタート？

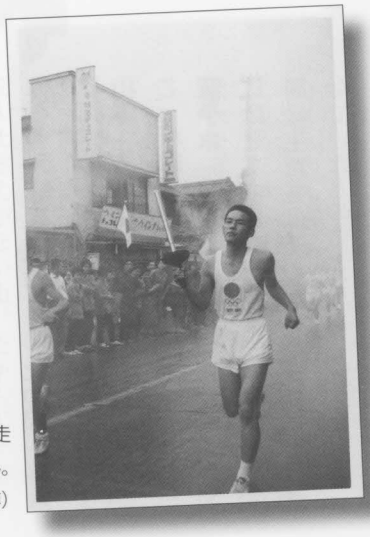
「スタートは舞鶴公園だったよね。」
「あれ？県庁じゃなかったっけ？」
「いやいや、舞鶴公園だよ。」

昭和39年10月10日の開会式のおよそ2か月前。8月21日ギリシャのヘラ神殿で東京オリンピックの為の採火式が行われました。幾つかの国を経由して沖縄に到着した聖火は4つのコースに分かれ、東京国立競技場を目指して日本中を駆け巡りました。

山本「昭和39年10月7日（水）第35区だったね。」
茂手木「そう。山梨は第一コースに入っていて、10月6日に山梨へ入り、僕たちは県内第二日目のスタートだった。」
金子「どんなコースでしたか？」
茂手木「それがね、僕は春日居から通学していて甲府市内のことはよく知らなかった。だから、舞鶴公園から県庁に向かったことしか覚えていないんだよ（笑）。」
山本「私は、県庁から出発したような記憶があるんだよね。」
茂手木「いやいや違うよ。集合してスタートしたのは舞鶴公園だったよ。ほら、この写真。」
金子「ああ、この石垣は舞鶴公園ですね。それにしてもこんなに大勢で走ったのですか？」
茂手木「そうなんだよ。」
山本「僕らよりも体格が小さく幼い顔していた子供たちが沢山いたね。」
茂手木「確か……中学生が15名くらいいたかなぁ。」
金子「では、舞鶴公園に集合して、ここからスタートで良いですね。」
茂手木「確かにそうだったよ。」
一同（笑）
山本「う～ん、そうだったかなぁ。聖火を受けたのが副知事だったから、僕は県庁だったと思っていたよ。」



舞鶴城公園で田中徹雄副知事から手渡された聖火を揚げる山本さん。後ろは副走者の茂手木さん。（写真提供：茂手木光博）



正走者の補助として走る副走者の茂手木さん。（写真提供：茂手木光博）

国道20号を走る甲府一高の聖火リレーランナー3名。（写真提供：茂手木光博）

茂手木さん持参の写真から、舞鶴公園で第二日目の出発式が行われ、副知事から聖火が山本さんの持つトーチへ移されたことがわかりました。

茂手木「舞鶴公園から県庁を一周して……あとは本当に覚えていないないなぁ。」

山本「距離はね、1・5キロだったんたよ。だから、舞鶴公園から県庁、平和通りか今の陸橋がある通りかを下って岡島の前は通ったな！」

金子「きっとそのコースでしょうね。岡島の前を通り、琢美小学校まで、旧20号を走ったのではないでしょうか？」

茂手木「そうだったんだね。舞鶴公園で副知事から聖火を受けて、県庁を通り抜けて岡島の前を通り琢美小までの1・5キロだね。」

山本「でも、県庁は一周ではなかったな。ロータリーみたいな、植木があるような広場を回って通りに戻ったかな。」

当時の新聞記事によると、〈甲府市の舞鶴公園を出発し、県庁前庭一周コースに入る聖火隊〉と写真入りでありました。また、〈山梨は国道20号沿いを、10月6日・7日の二日間にわたって、国道20号沿いの13市町村を走りぬけた〉と記されていました。

金子「第2日目のスタートだったとのことですね。では、第1日目はどうだったか何か覚えていますか？」

山本「知っていますよ。第1日目の最後は甲府商業高校が担当だったよ。その正走者が僕の隣村の名取さんと言う方でやはり足が速かったよ。彼とは陸上競技でライバルだったよ。この聖火リレーに一緒に参加して、今にして思えば彼が運んだ聖火を僕が引継いだことになるね。」

金子「そのあたりの話が、一高新聞縮刷版にありましたよ。」

本県の聖火コースは長野から入り、国町橋から上野原町までの102キロを102区に分けたので、山本くんの走るのは10月7日第35会区域の県庁前から琢美小学校までの1・5キロの道をギリシャで採火された平和の火を東京へ、本校の代表としていや全世界の若人の代表として運ぶのです。（中略）本校の代表山本君、高柳君、茂手木君に全校揃って声援を贈ろうではないか。

【一高新聞　昭和39年10月3日（土）より】

一万メートル競走が選考会

金子「ところで、この三名の代表ランナーはどのようにして選ばれたのですか？選考会とかあったのでしょうか？」

山本「体育の授業の一万メートル競争だよ。」

S56卒「私たちの時にもありましたよ。1万メートルに強行遠足、冬には一年生・二年生は駅伝もありました。よく走らされる学校だと思っていました。」

一同（笑）

茂手木「その一万メートルで一位になれば正走者になれるからと。この時は頑張ったね！だって、誰にでもチャンスがあったからね。しかも僕は三年生でスタートも早かったからとにかく一位でゴールを目指したよ。結果はもちろん一位！やったー！と思ったね。これで、正走者に決まりだって喜んだよ。」

山本「それを僕が横取りした。（笑）」

茂手木「そうなんだよね。ぬか喜びだったよ。後日ね、滅多にない事だから、今回は学年の枠を外して校内全体のタイム順位で決めますと、先生から聞かされてね。ガッカリしたね……でも、結果二位となり副走者として聖火リレーに参加できることになったよ。嬉しくてね。胸が躍ったね」

山本「一万メートルは千代田湖方面だったような覚えがあるけれど、どうだったでしょうか？」

茂手木「いつも覚えてないで悪いけれど、学校の裏手を走ったことは覚えている（笑）。」

山本「では、千代田湖方面でいいね（笑）。僕はね、陸上部だからもちろん狙っていたよ。加えて、陸上は部の名

誉をかけて皆真剣だったね。三名とも陸上部でもらうつもりだったよ。」

茂手木「僕はね、帰宅部だった（笑）。でもね、運動は得意だったし、やはりこれはチャンスと思って張り切ったし頑張った。で、1位だったのが一瞬にして2位になってしまってね。」

山本「それは、それは。先輩には悪いことをしちゃいましたね。」

茂手木「僕は三年生だったけれどこれにはとても興味を持ったね。運動部の同級生たちはそのための訓練をして臨んでいたとのことで、僕が勝ってしまって、ショックで悔しかったと今でも同期会等で会うといわれるよ（笑）。」

山本「陸上部の後輩が4位だった。4位だからもちろん落選。彼はかなりがっかりしていたよ。」

金子「代表に選考されてから、練習とかしましたか？一高新聞にも励んでいるってありました。」

山本「練習はしなかったね（笑）」

茂手木「そうだね、練習をした覚えはないね。当日まで期間も短かったような気がするな。緑ヶ丘だったかな、研修はしたね。」

山本「そうでしたね。僕はトーチの持ち方や、走る姿勢などの内容だった。」

茂手木「僕は副走者の役目について。中でも正走者が持つ聖火が消えそうになった時の対応についてだけはしっかり聴いていたな。」

文武両道

山本「ところで、56年の君たちは、一高の陸上部が全国高校駅伝に出場したことは知っている？」

S56卒「高校駅伝って、年末に京都を走る大会ですか。一高が出場していたことは知らないです。」

山本「僕の時代にはその大会に出場して、僕は花の一区を走ったよ。でもね、陸上部だけではチームが作れなくて、ラグビー部やサッカー部などから助っ人を頼んでの参加だったよ。」

茂手木「あの頃は高校総体でもいつも上位を争っていたね。日川、甲府工業、甲府商業と熱い上位争いをしていたよね。」

山本「そうだね、陸上部はもちろん、テニスやハンドボール、水泳など沢山の運動部がインターハイやその他の全国大会に出ていたよ。」

金子「文武両道、まさしく言葉通りですね。」

盛り上がる　強行遠足話

山本「その年は、聖火リレーの後、すぐに強行遠足。強行遠足は寒い頃っていう記憶があるな。」

茂手木「強行遠足の思い出は、数名の友だちとおしゃべりをしながら歩いたのが思い出かな。」

山本「私はね、一年生の時は途中にある検印所で腰をおろしてしまってね。それから寝てしまった。ゴールはしたけれど順位はね。ほら、陸上部だから……その順位では良くないよね（笑）。で、ゴールをしてから思い出したことがあってね。出発前に先輩たちが、『眠くなったらサロメチールを目につけろ！』とか言っていたことを。他には『腰をおろすな』とか。さすがにサロメチールはつけなかったけれど、腰をおろしてしまったね。先輩の言葉が心に染みたね。ところで、金子君は？」

金子「僕は残念ながら一度も小諸へは行けなかったですね。だから、帰りの電車が僕の強行遠足の思い出ですね。現在は、電車を利用される方の理解を得られずに帰りはバスです。」

茂手木・山本「時代は変わったね。」

山本「とにかく駅の階段がね（笑）。皆、手すりにしがみついて階段を上って下りたね。電車で座り込んでしまうから、まず立てない。一歩がなかなか出ない。電車に乗り遅れそうになった人もいたよ。でも、周りが優しかったね。」

茂手木「その行事が今も続いていることは誇りだね。こうやって一回り以上も後輩の方々と同じ話で盛り上がれるのは一高、強行遠足ならではのことですね。」

山本「僕はトップを走ることが多かったでしょう。だからね、清里から野辺山のシジミ汁までが一人旅もあってね。道脇の熊笹のガサガサする音だけでも怖くてね（笑）。真っ暗だしね。だから、遠くに小さくかすかに明かりが見えると元気が出てね（笑）。シジミ汁は本当においしかったね。」

金子「今でもシジミ汁は生徒を元気づけていますよ。」

山本「でも、一番の思い出は、夜明けに観た八ヶ岳。それから、千曲川のほとりの紅葉が綺麗だったこと。あの景色は今でも覚えているよ。」

茂手木「体格や格好は変わっても、歩いて小諸を目指すのは昔も今も同じ年頃の高校生。彼らもきっと同じような景色に感動しているでしょう。町並みは変わっても山や川はそのままだからね。」

山本「そうだといいねぇ。道で出会う人たちに声をかけてもらい、人の温かさや優しさも知るだろうしね。特に現代はそういうことが難しい時代だからね。昔の一高は良い言葉で言えば〈自由〉。甲州弁で言うと〈ほったらかし〉かな（笑）。そこから学ぶことが多かったよ。」

やはり一高校生ですね、強行遠足の話になると話は盛り上がる一方で止まりません。年代は違えども、「強行遠足」というキーワードで年齢を超えて一つになれる。これぞ、一高ですね。

2020年はTVで観戦？

S56卒「最後に一年後に迫りました2回目の東京オリンピック。聖火リレーなども話題になっていますが、どのように感じていますか？」

茂手木「僕はTVでゆっくりと観戦しますね。」

山本「私も同じくですね。今は、映像も驚くほど綺麗で肌の様子まで見られるほど、スタジアムで遠目に観戦するよりも接近した映像で見られるので。技術の進歩のおかげですね。」

金子「私もTVですね。」

山本「前回の時はバスをチャーターして観戦にいった記憶があるよ。行かなかった？」

茂手木「僕は、周りの同級生に遅れてはと受験の準備に入っていましたよ（笑）。」

山本「それが一高だったのか、県の陸上関係だったのかは忘れたけれど。聖火台の下で陸上競技を観戦したね。でも、本当に選手が小さかった。だから、今回はもっと小さいよね。」

茂手木「さっきも話したけれど、聖火リレーの後は受験準備でゆっくり観戦をした覚えがないね。だから、今回はゆっくりとオリンピックを楽しみたいと思っているよ。」

山本「一高の卒業生が選手だったらもう応援しちゃうね！」

55年ぶりの再会は、一瞬で空白の時を埋めてしまいました。そして、私たちS56卒を一緒に1964年当時に連れて行ってくれました。私たちが知らない当時の一高の話、同じ校舎で学んだことでも盛り上がりました。他には汽車通学の話、石和に温泉が湧いた話、等々本当に楽しいひと時でした。

この企画のヒントを下さった聖火リレー副走者の茂手木光博さん、正走者の山本順二さん、手掛かりが少ない私たちにたくさんの情報や資料を提供して下さった金子寛さん（S43卒・現甲府中学・甲府一高同窓会事務局長）に心より御礼申し上げます。

ありがとうございました。

（S56卒　鷹野由香）

山本さんのお母様が大切に保管していた聖火ランナーのユニフォームと。

おまけ

赤いブレザーをデザインした山梨県出身のテーラー

前オリンピックの開会式。入場してきた日本選手団は全世界の目を釘付けにしました。深紅のブレザーに男性は白のスラックス、女性は細かなプリーツスカート。誰もが日の丸をイメージできる、一目で日本選手団とわかるものでした。

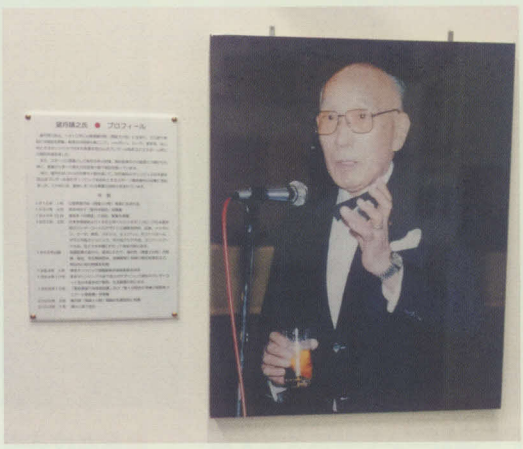
このブレザーをデザイン、製作したのは、山梨県富士川市（旧鰍沢町）出身のテーラー、望月靖之さんです。望月さんは30年にわたり、日本選手団公式ブレザーを製作されていたそうです。

また、このブレザーの裏地とボタンを手掛けた志村文吉さんも、望月さんと同じ富士川市出身でほぼ同年代ですが、地元にいた頃はほとんど接点がなかったとか。オリンピックの深紅のブレザーが二人を結びつけたそうです。この深紅色は、スポーツに造詣が深かった秩父宮さまからのアドバイスだったそうです。

「国には国のカラーがある。日本の歴史を調べて、日本の色をブレザーに表してみてはどうか。」

この言葉から、日本の祝い事で伝統的に紅白が使われること、そして真っ赤に燃える太陽の「赤」こそが、〝日出づる国〟の色だと気がついたそうです。

望月さんが長年にわたり収集された品々や貴重な資料が「富士川町スポーツミュージアム」に展示されています。



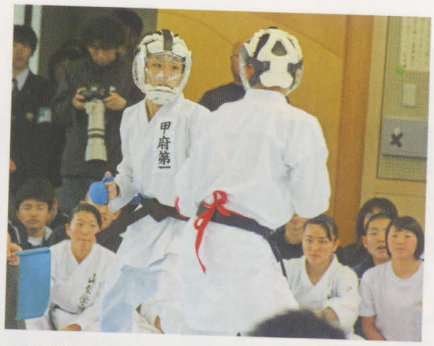
望月靖之さんを紹介するパネルと館内展示。前東京オリンピックの貴重な品々や資料がいっぱいだ。

深紅のブレザーも、きれいなまま展示されている。

一高祭●1日目はYCC文化ホールで発表、2日目は緑ヶ丘体育館で体育祭、3日目は本校で展示等

●探究科大学講座
●一高祭（3日間）

6月



県高校総体●平成30年度は、男子19位、女子12位の結果だった

●県高校総体
●探究科基調講演会
●前期中間試験

5月

入学式●平成30年度は新入生281名が入学した

応援練習●伝統の応援練習は2日間行われる

●入学式　●応援練習（1年生）
●探究科ウエルカムキャンプ
●前期生徒総会

4月

一高の一年

写真提供：フォトチョイス

強行遠足●平成30年度は、男子の小諸到達率が49.2%、女子の小海到達率が91.9%だった

研修旅行●平成30年度は、普通科が沖縄へ、探究科が台湾へ行った

●研修旅行

山梨県高校芸術文化祭●芸術文化祭賞を9つの部門で獲得し、多くの文化部員が平成31年度の全国総文祭（全国高等学校総合文化祭）に参加する。写真は上が吹奏楽部、下が茶道部の発表の様子

●県高校芸術文化祭
●後期中間試験
●探究科サイエンスダイアログ

創立記念特別講演会●平成30年度は、シミックホールディングス代表取締役会長執行役員CEO中村和男氏（S40卒）の講演を聞いた

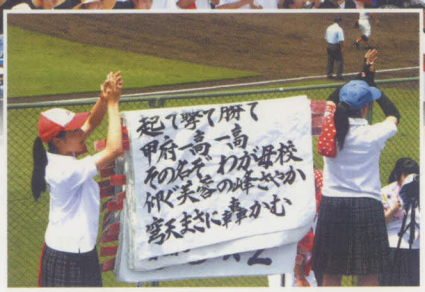
●強行遠足　●創立記念日
●新人戦

サイエンスレクチャー●一高生が中学生に化学をレクチャーする

山梨ブランドフォーラム●山梨の課題を探究し、解決策を世界へ発信することをテーマに、一高生とシンポジストが熱い議論を交わす

●前期期末試験
●サイエンスレクチャー
●やまなしブランドフォーラム

●夏季課外
●探究科宿泊学習会
●探究科グローカルセミナー
●探究科長野研究
●最優先企業訪問



野球応援●平成30年度は、２回戦で残念ながら帝京第三高校に１－８で敗れた

●三者懇談　●野球応援
●夏季課外　●探究科企業見学

9月 ≪ 8月 ≪ 7月

一高の一年

3月 ≪ 2月 ≪ 1月

卒業式●平成30年度は、271名の生徒が一高から巣立った

●卒業式
●教科ゼミ
●オーストラリア研修（１年生）
●アメリカリーダー研修（２年生）
●球技大会

やまなしブランドサミット●SGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）の取り組みの締めくくりとして、英語によって探究の成果を発表する

●如月の会
●後期期末試験
●表彰式

●大学入試センター試験（３年生）
●校内ブランドサミット
●やまなしブランドサミット

現役一高生への7つの質問（クエスチョン）！

たくさんの現役一高生が答えてくれました（平成30年12月実施）。誌面の都合から、載せられなかったものも多くありますが、生き生きとした一高生の学生生活の一端を感じてください。

Q.1 あなたの将来の夢は何ですか？

私は将来 世界中の人を驚かせるような人になりたい。世界を驚かせるアニメーションを作りたい。Disneyや Pixar、DreamWorksなどで活躍する人間になりたいと思っている。そのためにも海外に渡ってさまざまなことを学びたい。日本だけじゃものたりない。高はきっとこの夢を後押ししてくれる。

私の将来の夢は公務員になることだ。なぜなら山梨県は現在人口減少問題が、深刻化しているという現状を知り、自分の生まれ育った町を活性化させたいと考えたからだ。そのために大学では地域の諸問題を知り、解決策を考え、学びを深めていきたい。

私の夢は多くの人に山梨の魅力を知ってもらい、山梨の観光業をさかんにすることです。甲府一高に入学して地域交流や国際交流を経験することで自分の気づかない山梨の魅力を知ることができました。これからは外国語を習得し、世界中の人に山梨の魅力を発信していきたいです。

私の将来の夢は、生物系の研究者か、海洋生物の専門家になることです。小さい頃から生き物が好きで、今でもその気持ちを変わらず持ち続けています。特に、山梨県が海無し県であるからなのか、海の生物には、周りにいる生物とは違った憧れのようなものを抱いています。今後もこの理想に向かって努力していきたいです。

私の将来の夢は臨床心理士になってたくさんの人の笑顔をとり戻すことです。これはついこないだ見つけた夢です。私は良く友人から相談を受けたりグチを聞いたりするのですが、話した後相手がスッキリした顔をしているのを見るのがうれしいことに気づきました。また、そのスキルを生かして青年海外協力隊員として発展途上国の人達を幸せにしたいです。

私の将来の夢は発展途上国で看護師として働き、現地の人と共に医療体制や生活の質を改善することです。小学生の頃にテレビで見た途上国の子供達の笑顔に強く惹かれ、「行ってみたい！」と思うようになりました。そして発展途上国の現状を知るにつれて、「発展途上国で看護師として働きたい」と思い看護師を志しました。目標実現に向けて頑張ります。

私の将来の夢は、幼稚園教諭になることです。幼稚園生の時大好きな先生がいました。いつも優しく笑顔が素敵な先生で、泣いてばかりいた私をいつも元気にしてくれました。そんな先生に憧れ幼稚園教諭になりたいと思いました。私はこの甲府一高で大学進学を目指し、沢山の事を学び夢に向かって頑張りたいです。

Q.2 一高の自慢できることを教えてください！

一高の自慢できることは、やはり強行遠足だと思います。強行遠足はここ一高でしか体験できません。104kmという長い孤独の道を自分の限界と戦いながら歩く最高の行事だと思う。大人になってもいつでも話せるほどの一高の自慢です。強行遠足を通して、自分の強さ・弱さや、友達、保護者の優しさなどをあらためて見つけることができます。

一高の自慢できるところは、卒業後も自信を持って自分は一高生だったと言えるところだと思います。制服を着て歩いていると、「一高生か、そろそろ強行遠足だよな？俺らの時代はな～…」と誇らしく思い出を語ることができるのは本当にステキだと思います。

私が思う一高の自慢できるところは、伝統のある応援歌だと思います。なぜなら、私は野球好きの祖父の影響で毎年甲子園を見ますが、出場校の応援席から一高のような応援歌を耳にしたことがないからです。どんな状況においても聞くと鳥肌が立つあの応援歌をいつか甲子園の中継で聞けることを願っています。

私は、山岳部は一高の自慢できる所だと思う。大会に出た時、他校の山岳部の中で最も自由で笑い声が多いと感じた。このように、油断はしないが楽しむ姿勢の強い山岳部は、一高の誇れる所だと考える。しかし、伝統校故か戦績は年連続2位。せめて後輩に、この悪しき伝統を廃してほしい。

Q.3 あなたが最も尊敬する人は誰ですか？

私が最も尊敬する人は、マザー・テレサです。彼女の「笑ってあげなさい。笑いたくなくても笑うのよ。人間には笑顔が必要なの」という言葉のように私も、どんな状況にあっても人に笑顔を届けられる人になりたいです。

私はシャルル＝モリス・ド・タレーラン＝ペリゴールという政治家を尊敬しています。彼はある名言を残しました。「コーヒーは悪魔のように黒く、地獄のように熱く天使のように純粋でまるで恋のように甘い」という言葉なのですが私はこの言葉でコーヒーに興味を持ち好きになりました。なので私は彼を尊敬しています。

私が最も尊敬しているのは、母です。なぜならば、私の母は人の幸せを心から願える愛のある人だからです。誰かのためを思って行動できる人はとても素敵だと思います。だから、私はそのような母を見習って、温かい心をいつでも持っているようにしたいです。

私が最も尊敬している人は、プロレスラーの内藤哲也選手だ。彼は膝の靭帯を三度も切るなど、さまざまな困難に直面した。しかしそんな時でも彼は「歩」ずつ前へ進み、現在では新日本プロレスのスーパースターになっている。そんな彼はどんな時でも、「一歩踏み出す勇気」が大切だと語っていた。私も現状に満足せずに、一歩踏み出す勇気を持ち、少しずつ前へ進んでいきたい。

Q.4 今いちばんの楽しみは何ですか？

私の今一番の楽しみは筋力トレーニングです。体を動かすことが好きだったので、体を鍛えることでよりよい動きができるようになりたいと思ったのが始めたきっかけでした。筋トレを続けていると、ある時昨日までの自分とは違うなと気付く瞬間があります。その時、私は今までの自分を超えたということを実感するのです。そこで得た自信が今後の筋トレ・勉強のやる気を高めてくれるので、これからも続けていきたいです。

僕の、今一番の楽しみは、来年の強行遠足です。僕は、今年完走することができませんでした。強行遠足は自分の想像以上の辛さで、練習なしで行けると思った考えが甘すぎました。それから僕は、来年に向けて目的に長い距離を走って、体力や筋力をつける練習に励んでいます。強行遠足は、限界を超えなければ走り切れないと思います。だから、来年こそは限界を超えて走り切れることが今一番の楽しみです。

友達と会って話すことです。話す内容は互いの趣味や、周りの出来事などです。話しやすい友達ばかりなのでとても楽しく、毎日が楽しいと感じる代わりに、週末になると少し寂しさを感じます。彼らとの共有する時間を大切にして、これからも良い時間を過ごしたいと思います。

Q.5 あなたが好きな本や映画を紹介してください！

私が好きな本は「下町ロケット」です。この本はドラマ化され、とても有名な作品です。主人公である町工場の社長「佃航平」が社員たちと共に奮闘します。町工場の危機を乗り越える姿や方法がとても魅力的であり斬新です。

私が好きな映画は「The Greatest Showman」です。サーカスを設立した興行師を主人公としたミュージカル映画で、外見を理由に日陰者になった人たちがサーカスを通して、自分の居場所・存在価値を見い出していく過程が描かれています。外見や固定観念にとらわれることなく、広い視野と寛容さを持つ大切さを教えてくれる作品です。

私が好きな映画はLes Misérablesです。この映画をもとに、ア・カペラ部の定期演奏会を行いました。私はア・カペラ部に入るために一高に入学しました。この部活動を通して様々な体験をし、一生ものの思い出を作ることが出来ました。今でもこの映画を見たり歌を聴いたりすると、その時の感動や達成感を思い出します。

私の好きな本は、百田尚樹著の『カエルの楽園』です。この本は、童話調でありながら、現代社会の状況に一石を投じるような警世の書となっています。興味のある方はぜひ読んでほしいです。

私が今、特に好きな本は住野よるさんの「か」「く」「し」「ご」「と」です。この本はある5人の高校生の日常のお話で同じ場面を5人それぞれの視点で書かれており、人によってものの捉え方が違うことですれ違ってしまう思いが描かれていてとてもおもしろい本です。私はこの本を読んで人の気持ちを考えようと思わされました。

Q.6 あなたは一高の制服をどう思いますか？

一高の制服はとても個性的だと思います。私は女子のことしか分からないが、一番の特徴はエンジ色の蝶ネクタイ。もう少し大きいリボンがいいなと思うこともあるが、蝶ネクタイをきにとるとこれぞ一高生という気がしてきます。スカートは柄のあるものがいいなとか、丈が長すぎるなと思うことは別々あります。吊りスカートのボタンの外れやすさが気になりますが、卒業するときには、制服にきっと愛着を感じるのだと思います。

私はとても一高の制服が好きです。初めて見たときは、他の学校と少し違っていて、周りにとても驚いたのを今も覚えています。だんだん着ていくうちに、愛着が湧き、制服を着るのもあと少しなんだと思うと悲しいです。残りの日々もこの一高の制服といっしょに笑顔で学校生活を送りたいです。

私は一高の学ランがとても好きだ。一高の学ランは伝統であるからだ。特に校章などがあることによって一高の生徒になったのだという帰属意識を持つことができる。しかし私の友達は一高の制服は女装いだと言っている。なぜなら学ランは古くさいからだ。私の周りの人のほとんどは一高の制服はダサイと言う。特に女子の制服は少し変える必要だと思われる。

私は、正直一高の女子の制服をかわいいとは思いません。しかし、昔から変わらないこの制服でこその一高だと思いますし、突然に新しいデザインに変わるのも少し違う気がします。また、自分なりにこの制服に愛着も感じています。ただ、今一番気になるのは、なぜ女子にはセーターがあって、男子にはないのかということです。寒そうにしている男子も見かけるので、男子にもセーターがあってもいいのではないかと思う、今日この頃です。

Q.7 あなたは10年後、どんな自分でありたいですか？

私は10年後、自分にとって生きがいとなるような仕事に就き、自立している人でありたいです。また、私の将来の夢の実現に協力してくれている家族や友人といった身の回りの人々を支えていけるような思いやりのある人でありたいです。そのために、1分1秒を大切にして過ごしていきたいです。

私は10年後、大学を卒業し技術士補を経て技術士の資格を取得したいと考えています。大学で学んだ交通工学に関する専門的な知識や技術を生かし、安全・安心なまちづくりや多くの人が利用しやすい道路などを計画，設計から維持管理できるような仕事に就きたいと考えています。

私は10年後、自分のやりたいことに挑戦していたいです。私は将来の目標を持っています。その目標を実現するのは簡単なことではありませんが、どんなことでも挑戦しないと、実現するのは不可能です。なので、10年後は、自分のなりたい姿になれるようにやりたいことに挑戦し、努力し続ける自分でありたいと思います。

10年後のことなんて全く想像がつきません。10年前の私が今の自分を想像できたかというと、できないからです。今は将来の夢は決まっていませんが自分のやりたいことを見つけて好きなことを職業にしている自分でありたいです。そして、10年前の友達とまだ仲良していたい！

食に眼覚めるころ

中学までは、学校の昼飯は母親手製の弁当だった。いつもの自分の机に座り、いつもの周りの友達と、いつものヒーロー漫画の話なんかをしながら、いつも平和に食べていた。

だけど、一高に入学すると昼飯の景色は一変した。

先輩たちは三時間目と四時間目の間に横たわる休み時間になると、怒涛のように日新ホールに突撃して行き、猛スピードでラーメンやカレーなどを飲むように食い進み、あろうことか正規の昼休みには、さらにチキンライスやフライ丼を、今度は時間をかけて咀嚼したり嚥下したりしているのだった。

高校生になってからも、母親にズックのケースに入った弁当箱を持たされて通っていた僕は、その光景を一種の畏れと憧憬が入り混じった不思議な感情を抱きながら見ていのだった。

「ちくしょう、俺も絶対あそこで昼飯を食ってやる」

謎めいた情念に突き動かされた僕は母親弁当と決別し、せしめた小銭を持って登校することを覚えた。

さらば、青いズックケースの弁当箱。

こうして、外食という新たな食の世界に眼覚めることとなったのだった。

僕は早速、一級上のスズキ先輩に昼飯に連れて行ってくれるように懇願した。リアリズムの権化である彼は、僕の申し出に重々しくうなずき、その導きにより僕はやっと日新ホールに足を踏み入れることができたのだった。

初めて入る日新ホールは天井が高く、厨房では三角巾をつけたおばさんたちが忙しく働き、食器が触れ合う音や声高な話し声が渾然と反響し、喧騒が広がっているはずなのになんだか、モスクの中にでもいるような不思議に厳かな雰囲気だった。

重ならないように皿枠をかませてカウンターに高く積まれたチキンライスの皿の塔から、僕が一番上の一枚を取ってテーブルに座ると、リアリスト・スズキ先輩は一言

「それ、ソースかけて食ったほうが旨いから」

と言うのだった。

その日から僕の昼休みは、ラーメンとチキンライスの皿の丸い縁をメリーゴーラウンドのようにくるくる回る日新ホールライフに変貌を遂げた。

食客のほとんどが黒い詰襟の男子生徒であるその世界では、痴漢と間違われることもなく、そういう意味では平和なのだった。

思い返せば、ラーメンとチキンライスだけ食べていた記憶しかないのだけれど、この文章を書くために同級生に聴き取りしてみると、先述のフライ丼やカレーライスの他にも、天丼やサンマーメンというメニューまであったという証言が出てきたりして興味深い。

いまさらながら、せっかくなら全メニューを制覇しておけばよかったとノスタルジックな淡い後悔をしたりして。

こうして、二年生も終盤になると、伝統の「四時間目前の休み時間に流動系メニューを食べてから昼メシ本番に備える」という技すらいつの間にか自分のものにしていて、いっぱしの日新ホールマスターになっていた僕だったのだけれど、目の前に新たな食のステージが出現することになる。

それは「まえみせ」と「よこみせ」という二つの存在だった。

どちらも校門前にある、店内で飲食が可能な駄菓子屋的な店で、規模も扱い商品もほぼ同じような感じだった。

正式には「望月商店」と「なかざわ」という店名だったと思うけど、校門の正面にあるから「まえみせ」、校門を出て左側にあるから「よこみせ」という、言いえて妙なプラグマティズム的ネーミングだった。

この他、一高を背にして山手通り方面に下りて行ったところにある食堂や、山手通りの歩道橋の近くの中華料理屋、御崎神社のところの食堂、といった店にも出入りしていた一部生徒がいた。これらの店は校則で徘徊を禁止されている、完全な非合法地帯に存在していたので、彼らは確信犯的にイリーガルな行動をとっ

ていたのに違いなく、そういった生徒たちは、どことなく危険な香りを放っていた。

きっと彼らなりに、大人たちの定めたルールに縛られることに対して、ささやかな抵抗を試みていたのだろう。

少年の　隠れ煙草や　春の雨

ブンガク的に一句ひねるならば、まぁそんなところなのかな。

さて、話を「まえみせ」と「よこみせ」に戻そう。

先ほど、両店とも同じような扱い商品、と書いたけど「まえみせ」は、カップラーメンや駄菓子などを中心とした、どちらかというといわゆるインスタントな軽食類の品揃えが豊富な店だった。対して「よこみせ」は、ラーメンやうどん、さらにはおでんなど、店で調理を施したものを提供することを得意とする店だったと記憶している。

なぜか「まえみせ」には女子が多く集まり、今で言うところの「女子率の高い」店だったのに対し「よこみせ」の方に集まるのは、圧倒的多数が男子生徒で、こちらはいわゆる「ガテン系」の店だった。

もちろん例外はあって、己の食という行為を、目的ではなく単なる手段として用いる、という、カント哲学に喧嘩を売りながら「まえみせ」に入り浸っているような男子生徒もいて、彼らからは、カップ麺を通じて目当てのあの娘とのカップル成立を目論む、みたいな生々しい情動がオーラのように見え見えだった。

そして三年になった僕はといえば、「まえみせ」の店内で、女子生徒の真後ろに立ってプラスチックのフォークでエースコックワンタンメンなどをズルズル啜って痴漢と間違われる、という危険を回避するため、男子生徒の集う「よこみせ」派に身を投じたのは当然の流れだった。

先生方の干渉もなく、上級生という目の上のたんこぶもなくなった三年生にとって「まえみせ」と「よこみせ」は、天敵のいないパラダイスのような空間で、僕たちはまるでガラパゴス島の生き物みたいに独自の進化を遂げていった。ダーウィンに見せてやりたかったくらいだ。

こんなことがあった。生徒会長をしていたコアな男がやってきた。

彼は、入ってくると同時に

「マスター、煮込みうどん。それからママ、おでんの盛り合わせもくれる？」

などと言うのだった。

だって、「よこみせ」のメニューには普通のうどんしかなくて、壁のメニュー札のどこにも「煮込みうどん」などという魅惑的な文字はなかったし、メニュー表にない裏メニューという存在が世の中にあることを煮込みうどんで僕に知らしめ、コアな男に「大人の世界」というものの片鱗が垣間見えたような気がして、僕には奴が少しまぶしく見えたような気さえした。

とまあ、毎日こんな風なことを繰り返しながら三年が経ち、僕は一高を卒業した。

思えば、一高で過ごした三年間、僕は食というものを通じて少しずつオトナになっていったのだと思う。

日新ホールで先輩の話に真剣に耳を傾けるふりをしながらチキンライスをほおばった経験や、「まえみせ」「よこみせ」で友達と過ごした、たわいもないひとときの延長が今なのかもしれない、などと考えると、あの三年間がとても大切で愛おしい日々だったと、あらためて思うのだ。

そういえば、好きな女子のことを考えると、ちょっとだけ食欲がなくなることを覚えたのもあの頃だったっけ。

そんなことを考えていたら、新宿駅西口の雑踏の中に、今は無き旧日新ホールの中のざわめきが聞こえたような気がして、僕はちょっとだけ立ち止まって、ふたたび何事もなかったかのように、地下鉄の入り口に向かって歩き出したのだった。

（S56卒　末木博）

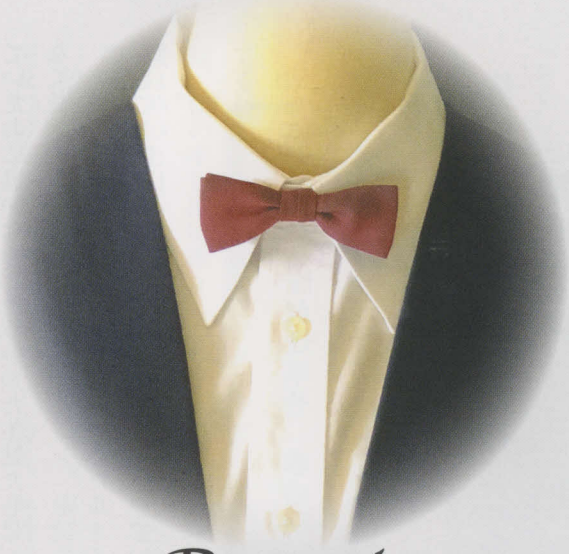
赤い蝶ネクタイの制服

「私は一高の制服が大好きです！」
「この制服に愛着を感じます！」

これは、本誌27ページに掲載した、一高の現役女子生徒たちの声だ。

70年前に誕生した「赤い蝶ネクタイの制服」は、一高生の誇りとして、今もカタチを変えずに愛され続けている。

そこで、女子の赤い蝶ネクタイと吊りスカートの誕生、また、その後のデザインや製造の変遷について、過去の資料をもとに、少しだけルーツを探ってみよう。



Bowtie

今も変わらない女子の制服。

「赤い蝶ネクタイの制服」は、男女共学が実施された1950年（昭和25年）に120人の第一期生女子が初めて着用した。

紺色の吊りスカート、紺色のブレザーに、臙脂色（深い紅色）の蝶ネクタイのデザインは当時、家庭科と美術を担当されていた先生方と女子生徒が手掛けたもので、実用性を重視した上で、一高生らしい「学ぶ姿勢」と「モダン」をイメージして決定されたらしい。

紺色と臙脂色の組み合わせは、気品と清潔感を出すために。スカートの吊り部分が太いのは、肩からずれ落ちにくくするために。

ワンウェイプリーツ（追っかけ襞）には「皆が前の人を追っかけて勉強すれば皆が良くなっていく」という意味があったそうだ。少々驚きである。

しかし、このプリーツスカートは、ポケットがなく不便だったため、昭和40年代に今のボックスプリーツに改良された。新しいボックスプリーツに意味付けするとすれば「追っかけ合った末に皆が向き合う」と解釈してみてもいいのかもしれない。

蝶ネクタイが生まれた経緯について調べてみると……

クロアチア兵がお守りとして首に巻いた「フォーカル」という布がルーツだとされる。そして英国ロンドンで1850年代に蝶ネクタイ（BOWTIE＝ボウタイ）と呼ばれるものが誕生し、日本では1884年（明治17年）に帽子商の小山梅吉の手により国産の蝶ネクタイ第一号が誕生したと言われている。

（ちなみに日本人で初めて蝶ネクタイを身に着けたのは、ジョン万次郎だ）

蝶ネクタイには、その形によって幾つかのタイプがあり、一高の臙脂色の蝶ネクタイは「ストレートエンドタイプ」と呼ばれるものだが、蝶のように少しだけ開いた「セミバタフライタイプ」に近いので、女性らしい優しいラインになっている。

1950年に蝶ネクタイを制服に取り入れたセンスの良さに改めて感服する。

制服の製造に関して、60年以上お世話になっている甲斐絹屋の青柳社長にお話を聞く機会を得た。

「素材は当初、毛100％のサージ（あや織りの毛織物）を用いていました。

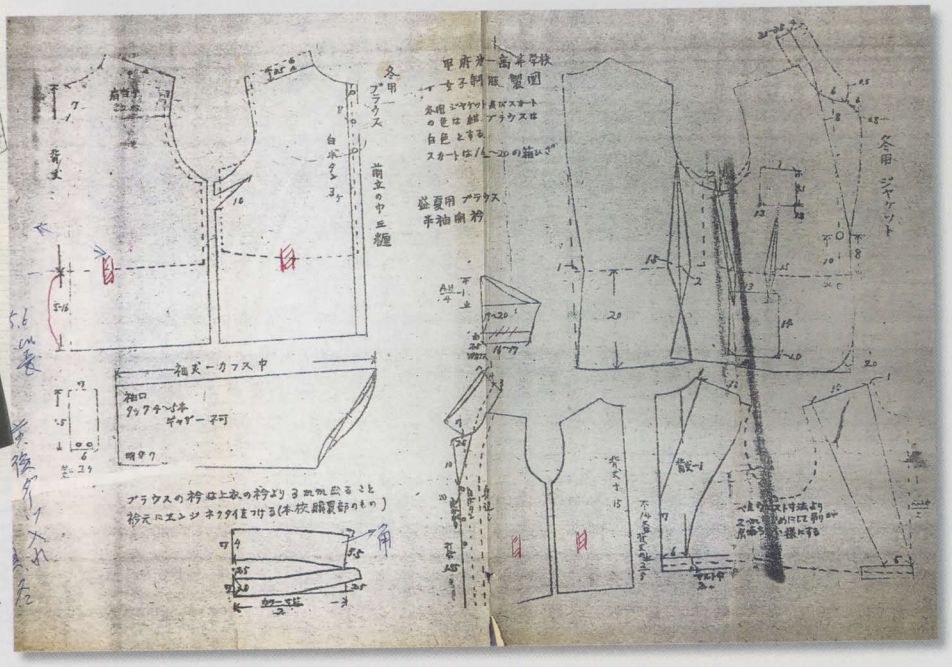
しかし、時代とともに生地の強度や耐熱性、速乾性などが求められ、毛50％、ポリエステル50％の混紡素材に変遷してきました。

デザインも時代の流れとともに新しいものが取り入れられるようになり、10年ほど前には、クラーク博士の刺繍を施したポロシャツにチェック柄のプリーツスカートといったスタイルの制服も考案されました。

現在は、クラーク博士のワンポイントが入った女子

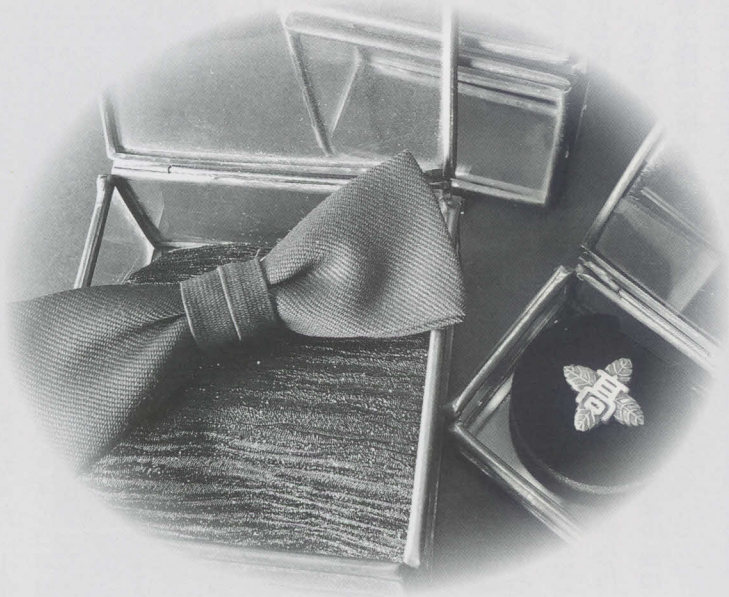
甲斐絹屋の青柳社長。

のセーターや男子のシャツも好評です。
時代で変わらなかった点もあります。それは縫製です。甲斐絹屋の制服は、今も昔と変わらず、県内の直営工場で一高の制服を熟知した職人によって、大切に縫われています。」



甲斐絹屋で保管されている、初期の製図。

17世紀バロックの時代、服、帽子、靴とあらゆるものがリボンで飾られるようになり、特に蝶結びのリボンは、男性の権威の象徴としての意味合いが強かった。
18世紀ロココの時代になると、美と絆の象徴として、女性の服、髪飾り、アクセサリー等にもリボンは欠かせないモチーフとして使われるようになった。
現代も揺るぎない魅力とパワーを持つ蝶結びのリボン「BOWTIE」には「成長」という意味も含まれている。



「赤い蝶ネクタイの制服」を最初に着た一期生の手記にはこう書かれている。
「女性は女性として、男性は男性としての誇りと豊かな心を持って、有意義な学校生活を送る事が一高の男女共学を栄えさせていく事の大きな力になるものである事と確信致します。」（「日新鐘」バックナンバーより）。

中学校の制服から「赤い蝶ネクタイの制服」に着替えた15才。
真新しい鮮やかな臙脂色の蝶ネクタイを着けたとき、一歩大人に近づいた気がした。
翌朝着る白いブラウスをハンガーに掛け、スカートを『寝押し』するためにベッドの上で襞をていねいに整える。赤い蝶ネクタイは、枕もとに置いた小さなボックスに収まって、朝が来るまでひとやすみ。
そんな就寝前の日課の記憶が蘇る。
18才。私たちは年季の入った深い臙脂色の蝶ネクタイを卒業した。
あれから38年経つ今も、私の蝶ネクタイは、あのお気に入りだった小さなボックスに収まっている。
3年間、私たちを包んでくれた赤い蝶ネクタイの制服にもう一度お礼を言おう。「ありがとう！」

（S56卒　及川恵美）

山下トリオ、ドイツのライブハウスでの演奏風景。中央でピアノを弾くのが山下洋輔、右が坂田明、左が森山威男。

甲府と東京をつないだ先輩／その3

世界に羽ばたいたジャスドラマー
森山威男さん（S38卒）

故郷

小学校3年生の時、旅回りの楽団のドラムを聴いた。「勝沼劇場」は半分畳敷きの客席で、週末だけ映画館になったが、時々は芝居小屋になる古い劇場だった。

この勝沼劇場にある日、旅回りの楽団が来た。小学校3年生の私に生の演奏は胸を刺されるほどの衝撃だった。「俺はドラマーになる」と、この時決めた。

おじいちゃんに薪を削ったスティックを造ってもらい、日がな一日縁側を叩いた。

父親が子供の将来を考えて、勝沼町から甲府市に越したのは中学1年、昭和32年の春だった。

2クラスしかなかった勝沼小学校から、1学年16クラスの甲府市北中学校は教室も校庭も人、人、人。途中から編入した私が、音楽部で人気のドラムなどさせてもらえるはずがなかった。

仕方なく演劇部に入り、与えられた役になりきることに専念した。演劇部での約2年は、人前で何かをやることに慣れるには十分だった。

しばらくドラムのことは忘れて、演劇に打ち込んだ。

3年生の時、進学指導の先生から、今の成績では甲府一高に入学するのは無理だと言われた。

それはまずい。進学校に受からないとその先が閉ざされ、「東京に行ってドラマーになる」夢も無くなってしまう。中学3年生の2学期から猛勉強し、なんとか甲府一高に入学できた。

甲府一高で早速ブラスバンド部に入部したが、割り当てられたのはドラムではなくトランペットだった。

1年生の終わり頃、3年生の笠井先輩からドラムの教えを受けた。笠井先輩はご自宅に私を招待してくださり、ジャズのレコードを聴かせてくださったり、様々なドラムのテクニックも教えて下さった。

この時から1日8時間くらい、猛練習をした。

高校2年生からスネアドラムを担当するようになり、毎日が喜びだった。ある日、音楽の金子先生が私の練習ぶりを見て「芸大を目指してみない？」と声をかけてくださった。

嬉しさと不安が入り混じった気持ちで父親にお願いした。

「俺、ドラマーになりたい。芸大の先生のところに通わせてください」

父は「お前が考えているようなドラマーにはなれんだろうが、それでも良いならやってみろ」「やったー」。

プロを目指す嬉しさとドラムで生活するという未知の将来への不安を抱いて、高校2年生の夏から毎週末東京に通った。

芸大の打楽器教授、小宅勇輔先生のお宅には何十人もの受験生が全国から集まって来ていた。

プロフィール　森山威男（もりやま・たけお）

1945年東京生まれ。生後すぐに山梨県東山梨郡勝沼町（現甲州市）に移住。甲府第一高等学校在学中にブラスバンド部でドラムを担当。東京藝術大学音楽学部器楽科に入学。在学時からジャズのセッションに参加し、山下洋輔と親交を持ち、1969年に結成された山下洋輔トリオに初代ドラマーとして参加。特異なフリーフォームを完成させ3度のヨーロッパツアーで激賞を受けたのちの1975年に山下洋輔トリオを退団。1977年より森山威男カルテットなど、自己のバンドでフォービートジャズに回帰、日本はもとよりドイツ、イタリアでも演奏。2001年度に第35回ジャズ・ディスク大賞日本ジャズ賞、第56回文化芸術祭賞レコード部門優秀賞を受賞。2002年には第27回南里文雄賞を受賞。2017年に著書『スイングの核心』を発表。山下洋輔トリオ時の特異なフリーフォームを自ら解析。2001年からは現居住地である岐阜県の可児市文化創造センター主劇場にて『MORIYAMA JAZZ NIGHT』を毎年開催。地元の文化活動に貢献している。

1年浪人して、昭和39年度の芸大打楽器合格者3人の内の一人になれた。

「これでドラマーになれる」と思っていたら、大間違いだった。

芸大はクラシック専門の大学で、勝沼劇場で見たようなバンドはどこにも無かった。

仕方なくオーケストラでパーカッションを学び、やがて、日本フィルで正規団員と同じくらいの頻度でオーケストラの舞台に立つようになった。仕事をするという喜びはあったが、「これでいいのか?」と悩んだ。

「俺のしたかった音楽ではない。このままだとオーケストラの団員で一生終わるぞ」

悩んで悩んで、悩んだ挙句に大学3年の終わりに退学届を出した。親にも相談せずに自分を追い込んだ。

もう後がない! 経験も知り合いも無いジャズの世界に無理やり自分を押し出した。

その日から様々な大学の部活の部屋に行ってジャズとの関わりを持とうとした。

しかし、「面倒臭い奴が来た」と早稲田大学でも東京大学でも国立音楽大学でも、嫌われた。悲しかった。

同級生の今村がNHK交響楽団、もう一人の同級生の定成が東京都交響楽団に入団が決まった時、私は趣味で楽しんでいる他の大学の生徒に嫌われながら、みんなの練習を見させてもらっていた。

悲しく、寂しかった。自分を受け入れてくれる人は、東京のどこにもいなかった。父親のことや甲府の友達のことが無性に思い出された。

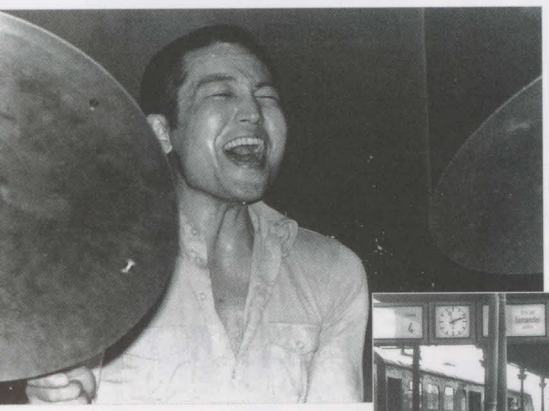
あの頃は良かった! ドラムを叩く喜びがあった。東京に出て行くという希望があった。しかし、今の私は東京という大海から、中央線の線路に沿って、故郷を目指す鮭のようだった。退学することを父に話す勇気はなかったが、「この線を辿れば懐かしい甲府に着く」と何度も線路を眺めた。帰りたいけれど帰れない甲府がどうしようもなく遠く、また恋しかった。

そんな訳で東京生活は中央線沿線の駅から離れられなかった。中野に1年、国立に2年、その後は西荻窪で暮らした。今だにその頃の「ふるさと恋し」は抜けていない。

1969年には「山下トリオ」でブレイクしたが、ヨーロッパの大会場で叩くドラムソロは、いつも甲府の景色を重ねた。ドラムの練習をした一高の講堂。将来を夢見た日新ホールの屋上。先生や先輩、同級生や父親。私の脳にハッキリと甲府が刻まれています。

74才の私は力の限りこれからも、鮭のように故郷の川を目指して登って行きますよー!

(S38卒　森山威男)



1974年、ヨーロッパツアーにて。

この記事は、森山威男さんが本誌のために書き下ろしてくださいました。来る2019年7月19日(金)、甲府・桜座にて森山威男さんの公演が決定しています。ぜひ足をお運びください。くわしくは桜座公式ページまで。

桜座公式ページ　http://www.sakuraza.jp

東京で同窓生をつないだ記念誌「日新鐘」

甲府中学・甲府一高東京同窓会は、1969年の設立から今回で第60回を迎えた。その記念誌「日新鐘」は1992年に創刊され、2年間の休止期間があったものの、1995年からふたたび刊行が始まり、その後休みなく刊行されて、今号で通算26号目を数える。ここでは歴代の表紙を並べて、東京で同窓生をつないだ記念誌「日新鐘」の歴史をたどってみよう。

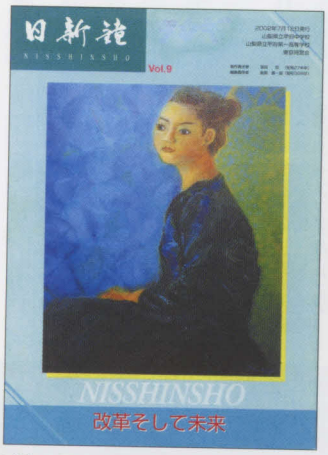
第1号 1992年4月15日発行

第5号 1998年7月8日発行

第4号 1997年7月2日発行

第3号 1996年7月3日発行

第2号 1995年6月2日発行

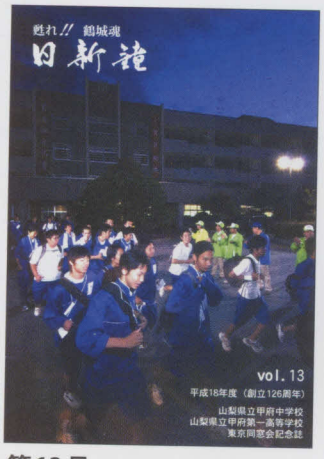


第9号 2002年7月12日発行

第8号 2001年7月13日発行

第7号 2000年7月14日発行

第6号 1999年7月10日発行



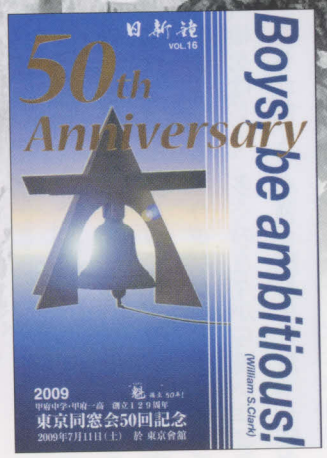
第13号 2006年7月8日発行

第12号 2005年7月8日発行

第11号 2004年7月9日発行

第10号 2003年7月11日発行

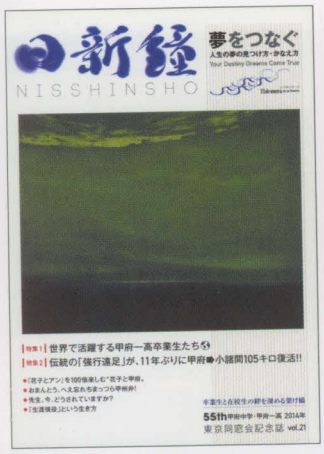
第17号 2010年7月10日発行



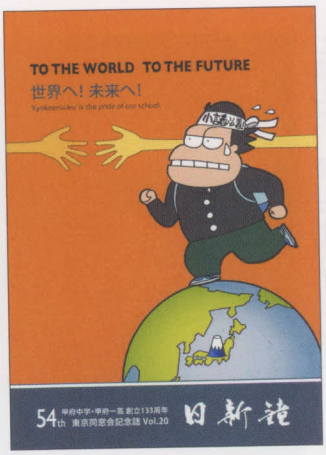
第16号 2009年7月11日発行

第15号 2008年7月26日発行

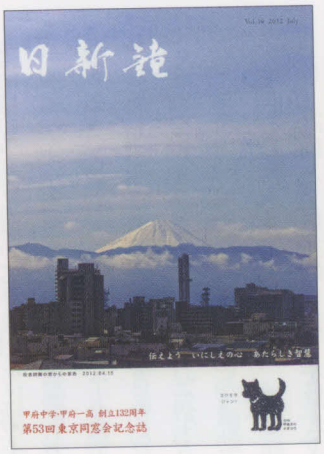
第14号 2007年7月21日発行



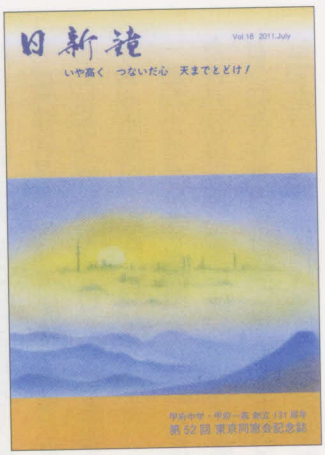
第21号 2014年7月26日発行



第20号 2013年7月20日発行



第19号 2012年7月14日発行



第18号 2011年7月9日発行

第25号 2018年7月14日発行

第24号 2017年7月8日発行

第23号 2016年7月9日発行

第22号 2015年7月11日発行

一紅会会長を仰せつかって

一紅会会長
峯川文江（S44卒）

日頃は一紅会の活動に深いご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

昨年7月の東京同窓会において、第5代一紅会会長として承認いただき、早1年が過ぎようとしています。これまで3期に渡り、副会長として一紅会に携わって参りましたが、立場が異なるとこれ程までに違うのかと、今更ながら歴代会長のご苦労に頭の下がる思いでした。前会長谷口様をはじめ、多くの方々から温かなお言葉やアドバイスをいただき、大変嬉しく、ありがたく、心強く感じました。一紅会に対する皆様の篤い思いを感じた一年でもありました。

今年も一紅会最大の行事である「第22回春の講演会」を、去る3月9日（土）に行いました。歴史学者の笹本正治氏を講師にお迎えし、「戦国時代の女性たち」と題して講演していただきました。「一紅会の為に！」と、女性に視点を当てた内容は、いつの世も働きながら社会を支えている女性たちへの応援歌のようでした。その後の懇親会も、昭和20年卒の大先輩から平成29年卒の若者までと、同窓生の縦の繋がりの、和やかな語らいの場となりました。盛況裏に終わりましたことを感謝しております。

女性のネットワークとして発足した一紅会も、当初の目的はほぼ達成されつつあると思っております。今後の課題としては、東京同窓会や一紅会を、若い同窓生といかに協力して盛り立てていくか、歴史を繋げていくかだと思います。その為にも、魅力ある講演会を企画しようと、年3回の幹事会ではいつも活発な意見が交わされております。各学年の幹事も70名を超え、大所帯となった一紅会ですが、平成卒の幹事が少ないことが心配なところです。

若い力を得て、新元号「令和」と共に、一紅会が更に発展いたしますように微力ながら努力して参ります。

なお一層のご指導、ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

一紅会の去年・今年

一紅会第3代会長
飯田富美子（S33卒）

第60回甲府中学・甲府一高東京同窓会、開催おめでとうございます。

平成8年（1996年）私が中心になって創設した一紅会は今年で24年目を、主催する「春の講演会」は第22回を迎えました。光陰矢の如しの感を深めております。

当初、東京同窓会は参加者も少なく、女性は20人～30人だったとか。当番幹事の事務局長に就任した私は、組織の拡大と活性化には女性の参加、活躍こそが重要との思いに至り、同窓男性幹事の協力のもと、手探り状態で女性ネットワークを構築しました。そして事業方針や内容の検討に取り組み、研鑽と絆の場として「講演会」を活動の主軸に置いて平成10年に第1回講演会を開催し、一紅会が始まりました。

昭和28年が男女共学第1回卒業生であったことから初代会長に28年卒の渡辺圭子様を戴き、以来、3・11東日本大震災の翌日に開催予定だった講演会も日程、場所を変更し、今日まで継続してきました。これも同窓生の方々からの力強いご支援とご協力を頂きました事、講師の先生方の専門分野における奥深い講演内容が我々の向学意欲の琴線を震わせ、大きな感動と感激を沢山頂きました事に他なりません。

更に特記すべきこととして、第8回講演会の講師の渡辺房男先生を囲む歴史研究会は、24回（平成30年5月）を数えました。渡辺房男先生と推進役の元副会長井上若子様には、これまでのご苦労に対し、深く感謝申し上げます。

〝継続は力なり〟。平成最後の年、第22回春の講演会には多くの方にご参加いただきました。新しい「令和」の年を迎え、変化を先取りして新たな展望に向かって再考する時期かもしれません。

これまで会長として頑張っていただいた、初代会長の渡辺圭子様（故人）、第4代会長の谷口百合子様には、深甚なる感謝を申し上げると共に、現会長の峯川文江様と一紅会幹事の皆様には、ますますのご活躍を期待し、【明日の一紅会】の未来を託して大いなる乾杯を!! 同窓生の皆様には衷心より感謝とお礼を申し上げます。

〈寄稿〉

筋書きのないドラマの中で

IAEA事務局長特別補佐官
市川とみ子（S56卒）

D. Calma / IAEA撮影

一紅会の皆様には、大変ご無沙汰致しております。

外務省や国際機関での勤務を通して見た女性の活躍についてご紹介する機会をいただき、御礼申し上げます。

私は約5年前から、外務省から国際原子力機関（IAEA）に出向し、天野事務局長の特別補佐官として管理部門（予算・人事など）と北朝鮮を担当しています。

国際機関トップの間近で、重要な政策決定過程や、いかなる組織にとっても活動の基盤である予算と人事、そしてIAEAにとっても日本にとっても重要な課題である北朝鮮の核問題に深く関与できることは、大変貴重な経験です。

IAEAは、核不拡散と原子力の平和利用という業務のため技術系の職員が多く、国際機関の中では女性の割合は最も低い方ですが、最近は女性職員の増加に努めており、国際的にリクルートされた職員（約100カ国出身）の中での女性の比率が昨年初めて30％を超えました。私が勤務する事務局長直属オフィスでは約半数が女性です。

日々、事務局内の様々な部署にいる優秀な女性職員と一緒に仕事をしていて、すぐに思い当たる国籍だけでも、アメリカ、モロッコ、クロアチア、イタリア、ドイツ、ベラルーシ、スリランカ、ブラジル、ドミニカ共和国、南アフリカ、・・・数え切れません。

男女を問わず、全く異なる文化的背景を持つ人々が集まって共に仕事を進め、170カ国を超える加盟国と常時やりとりする国際機関は、文字通り日々の仕事がグローバルコミュニケーションの実践の場です。

日本は分担金の比率に比べて国際機関職員の数が少なく、日本政府も職員を増やす努力をしています。

一般化するのは男性に恐縮ですが、印象として女性の方が活発な方々が多いように見受けられます。例えば、現在国連で軍縮担当事務次長として活躍している中満泉さんは、旧ユーゴスラビアの国連平和維持活動（PKO）で一緒に仕事をした元同僚です。

国際会議は多くの国の主張が飛び交い、発言の内容はもちろん、発言順や言葉の選び方など、ちょっとしたきっかけで議論が思わぬ方向に展開することもままある「筋書きのないドラマ」の舞台です。

IAEAへの各国の代表団にも、大使をはじめ数多くの女性が含まれています。外務省勤務の時から感じていますが、国際機関や国際会議は、会議での「弁舌」に加えて非公式な協議などきめ細かなコミュニケーションが大事な場面が多くあります。また、比較的スケジュールが計画しやすい側面もあって（国際機関でもスケジュールが全く予測できない私のようなポストもありますが）、多くの国にとって女性が活躍しやすい場なのではないかと思います。

D. Calma / IAEA撮影

D. Calma / IAEA撮影

日本国内でも「女性の活躍」が推進されていますが、国際的な場での日本女性の活躍も一層進んで欲しいと願っております。一紅会関係者の皆様にも、是非このような可能性に目を向けていただければ幸いです。

第22回 一紅会主催「春の講演会」

戦国時代の女性たち
～武田氏と女・子ども～

講師／長野県立歴史館 館長 **笹本正治** さん（S45卒）

第22回 一紅会主催「春の講演会」は、平成31年3月9日、好天の中、アルカディア市ヶ谷にて開催されました。

講師の笹本正治さんは、昭和45年に甲府一高を卒業され、国立信州大学卒業後、信州大学教授、同副学長を経て、現在は、長野県立歴史館館長をされておられます。甲府開府五百年の今年に、まさにぴったりの講師の方といえます。

講演開始前に、フロイデ合唱団によるウェルカムソング「冬の夜・雪」「海・うみ」「マイウェイ」（指揮 伊東 剛氏、ピアノ 山下恵子さん）が歌われ、会場内は和やかなムードに。そして、笹本さんが颯爽と演壇に！

女性の集まりの一紅会の講演会ということですが、男性の同窓生がたくさんいることに驚かれ、演目は女性に向けて作成したと注釈をされてから、本題に入られました。

お話は、昨年行かれた、アメリカのアナーバーという街にあるミシガン大学での体験から始まりました。

ミシガン大学内の建物「ミシガンリーグ」は、内部に展示されている絵から石像まで、全てが女性。1890年に、女子学生・卒業生・教員の妻たちは、大学とアナーバーにくらす女性の社会的交流促進のために女性連盟を結成。1921年、この建物をキャンパス内の女性のレクリエーション活動の拠点として以来、大学ユニオンのひとつ、キャンパスライフの重要な中心地に。

このアメリカでの体験に触れ、現代の女性の地位と立場、ひいては戦国時代の女性たちに目を向けられたということです。

（以下太字は、笹本正治さんのお話より抜粋）

NHKの大河ドラマに代表されるように、テレビや映画、小説などでは、戦国時代が盛んに取り上げられます。

特に山梨県人にとっては、戦国大名の武田信玄は、近しく感じられます。小説においても、信玄は主人公です。

ところで、小説などにおいて、戦国の社会はどれくらい実態を伝え得ているでしょうか。

戦国武将を描いたものより、信玄・勝頼の時代に笛吹川沿いに暮らす農民を描いた深沢七郎の「笛吹川」の方が、より実態を伝えているかもしれません。

今回の講演で特に主張したいのは、戦国時代が人身売買の時代であり、多くの奴隷を生み出したのが戦争であったということです。

特に女性たちは、戦乱の中で拉致され、商品として売られました。

ここで笹本さんは、森鴎外の「山椒大夫」に触れ、足が弱ったお婆さんたちも売られた話、戦乱で民衆が安全を求めて山小屋や寺、神社に逃げ込む話、長野県塩尻の大宮八幡宮にある「武田信玄旗立てイチイの樹」が戦乱を避けるためだった話などをされました。

パワーポイントでは、現在に残されている、戦場を逃げ惑う女や子どもたちが身ぐるみをはがされる様子などの絵がスクリーンに映し出されました。

武田氏の戦争においても、他国の多くの女性や子どもたちが甲州に連行され、身代金を取られたり、売買された事実を知るべきです。甲州の繁栄は、他国の犠牲の上に成り立っていたという側面もあるのです。

戦争があると、人々は自分の身を守るため山奥に逃げ込んだりしていました。安全を確保することは、当時の人々にとって、最大の課題だったのです。

戦国時代に、同じ日本人同士が戦わねばならなかった理由の一端には、異常気象による食糧難がありました。

他人の物を奪ってでも生きていかねばならなかったのです。

そんな厳しい時代にも、女性は生き生きとしていました。

信玄の母親の大井夫人は、信玄の行動にも影響を与えたようです。大井夫人は、人質のようなかたちで信玄と結婚したそうです。平仮名で書かれた夫人の伸びやかな美しい文字に見とれてしまいました。

また勝頼の祖母は、自身の判子を押した文書を残しています。この時代の女性が判子を持っていたとは驚きです。

ここで笹本さんは、勝頼の最期にも触れ、信玄の家来だった者たちと、諏訪を治めていた勝頼とに、最後まで行き違いがあったのでは、と話されました。心が痛みました。

世界のどの国に行っても、市場などでは女性が活躍しています。日本でも、商業の場には、多くの女性がいます。

戦国時代においても、商売では女性が活躍していました。

古綿・古小袖・破れ帷子・古帯などの衣料品、古糸・櫛などの女性小物、酒作・米売・豆売・魚売・小原女・心太売等々。また、職人としても、多くの女性が働いていました。染め・機織り・縫物師、さらには芸能民として、女盲・白拍子・比丘尼……。

戦国時代に日本へ来たヨーロッパ人は、「ヨーロッパでは、財産は夫婦の間で共有である。日本では、各人が自分の分を所有している。時には妻が夫に高利で貸し付ける」と話しています。

今でも女性のへそくりは、女性のものであり、家族の財産ではありませんが、戦国時代も同様だったようです。

ヨーロッパでは妻は夫の許可がなくては家から外出できない、日本の女性は夫に知らせず好きな所に行く自由を持っている、という話は意外でした。

いつの時代でも、女性は輝いていました。一方で、力を持たない女性たちが虐げられてきたことも事実です。

とりわけ戦乱の時代に、最も悲惨な思いをしたのは、女性と子どもです。

昨年のノーベル平和賞は、コンゴの産婦人科医デニ・ムクウェゲ氏、イラク北部出身の人権活動家ナディア・ムラド氏が受賞しました。受賞理由は、戦争や武力紛争に抗い、また性暴力を撲滅するために払われた努力でした。

現在でも紛争は続き、悲惨な状態におかれている女性がたくさんいます。女性が真に輝ける時代は、性差や身分差などがない、平和な社会です。

日本の戦国時代を美化してはなりません。戦国のロマンを語るよりも、戦争の無い時代に、戦国ではない時代をつくることに、お互い夢を持つようにしていこうではありませんか。

笹本さんの人間味あふれた講演、心にしみ入りました。

ありがとうございました。

質疑応答コーナーでは、お二方の先輩の質問に、笹本さんが答えられ、講演会を終了いたしました。

＊

休憩後、一紅会峯川文江会長から、ご出席者の皆様への謝辞。

続いて、東京同窓会清水明会長のご挨拶と音頭で乾杯。

しばしのご歓談を経て、ゲストの山梨県人会連合会の弦間明会長（日川高校出身）から、今年は山梨で開催される「山梨県人会連合会創立七十周年記念総会・大会」（5月25日）へのお誘いとお話。

笹本正治さんとは同学年の小口弘毅さん（小児科医）から、今は亡き佐々木まち子さん（一紅会）が中心となり発足した「あおぞら会」のお話と「へレンハウス物語」という本のご紹介。

以降は例年通り。

甲府中学・甲府一高東京同窓会の本年度当番幹事を代表して、昭和56年卒小田切仁幹事長より、7月6日開催の東京同窓会へのお誘いのご挨拶。

甲府中学・甲府一高同窓会本年度実行委員会、昭和62年卒を代表して、宮川勇徳委員長より、5月19日開催の甲府同窓会へのお誘いとご挨拶。

フロイデ合唱団で使ったピアノがありましたので、山下恵子さんに弾いていただき、全員で甲府一高校歌を斉唱。

最後に、一紅会の命名者である林野妙子一紅会副会長よりご挨拶をさせていただき、終了いたしました。

380名ものご参加を得て、大変充実した講演会を開催することができました。誠にありがとうございました。

また来年も、ふるってご参加くださいませ。

（S56卒　石井ひとみ）

広告目次

今年も多数の広告掲載
誠にありがとうございました。

ア
アーキシップ帆一級建築士事務所……61
㈱アイビット……表4
㈲アウテリアあかざわ……63
アスビック㈱……58
㈱アセッツアールアンドディー……61
アロマ・リンパケア……62
㈲アンリミット・ジャパン……58
イ
石井ひとみ……58
石原ヒサシDANCE SCHOOL……56
今村耳鼻咽喉科 めまい難聴クリニック……62
㈱インテリアさの……60
ウ
㈱うちだ……61
内田クリニック……49
エ
SMBC日興証券㈱……56
NECプラットフォームズ㈱……52
EMI DESIGN STUDIO……62
オ
大泉はなわクリニック……54
OMC……55
沖ガラス㈱……56
おぐちこどもクリニック……50
小澤石油㈱……63
カ
笠井クリニック……51
キ
公益財団法人キープ協会……49
特定医療法人南山会峡西病院……60
ク
㈲久保田実業……62
㈱熊谷組……52
コ
国際建設株式会社……62
河野スポーツ㈱……59
甲府一高湘南地区同窓会……56
甲府一高・東京三十一会……44
甲府一高・昭和33年卒「東京さんさん会」……59
甲府一高・東京三五会……51
甲府一高・東京38会……54
甲府一高・昭和42年卒一同……63
甲府一高・昭和43年卒・東京43会「よん燦会」……56
甲府一高・昭和47年卒・東京47会……61
甲府一高・昭和49年卒・東京49会……55
甲府一高・昭和50年卒・東京50会……55
甲府一高・昭和51年卒・東京51会……48
甲府一高・昭和53年卒・東京53会……57
甲府一高・昭和54年卒東京同窓会幹事一同……表3
甲府一高・昭和55年卒同窓会……42
甲府一高・昭和56年卒・東京56会「百新会」……57
甲府一高・昭和57年卒東京同窓会……60
甲府一高・昭和61年卒同窓会……43
甲府一高・昭和62年卒同窓会……43
甲府一高野球部S56・57卒無尽会……55
甲府通運㈱……57
㈱コスモエナジーコラニー㈱……61
サ
サイキデザイン……60
さいとうクリニック……61
OS・OM齊藤歯科医院……54
㈱境川カントリー倶楽部……47
さくら少額短期保険㈱……50
さひはゐ組……53
㈱サンテック……63
三宝出版㈱……53
㈱サンリオ……59
㈱三和リース……58
シ
NPO法人C&Cクラブ……61
シミックホールディングス㈱……52
JAZZ・IN・ALONE……62
㈲ジャパンアートメモリー……61
㈱少國民社……53
㈱正直堂……55
㈲昭和総業……63
㈱昭和鉄工……63
ス
鈴木製菓㈱……59
住友不動産㈱……62
セ
㈱清流舎……60
一般社団法人全日本花押会……57
タ
大志堂薬局……58
泰和電気工業㈱……51
滝田建材㈱……58
㈱タケウチエステート……62
㈱たけまる……62
タマ生化学㈱……47
㈱たまパッケージ……56
チ
千野建材㈱……58
千代田セレモニーグループ……表3
テ
㈱でり坊……62

ト
㈱東和……54
凸版印刷㈱……59
㈱Ｄｒｅａｍｍａｐ……63
ナ
㈱内藤ハウス……52
㈲中川看板店……59
中込勝子税理士事務所……60
中嶋文夫設計事務所……60
㈱中村……63
ニ
２０１ゴルフ会……56
日新会……49
二宮 公俊（昭和55年卒）……45
一般社団法人日本車いすカーリング協会……42
日本テレビ放送網㈱……61
㈱ニュー平和……63
ネ
ネッツトヨタ甲斐㈱……57
ノ
㈱野崎設備……62
ハ
㈱はくばく……48
林野内科医院……57
㈱早野組……表2
伴野クリニック……50
ヒ
㈱美装開発……60
㈱日立物流東日本……59
ひはらクリニック……61
百新会……46
百新会 カラオケ部……63
平井幸男事務所……62
廣瀬医院……61
フ
フォネットグループ……54
富国生命相互会社……48
富士観光開発㈱……57
富士急行……51
ミ
㈱三菱ケミカルホールディングス……62
㈱緑が丘設備……63
㈱湊興……63
㈲宮川レッカー……63
ミヤシタ工業㈱……51
メ
明和税理士法人……63
モ
医療法人社団 望月耳鼻咽喉科……61
ヤ
㈱やさしい手甲府……54
大和葡萄酒㈱……63
山梨クラリオン㈱……61
㈱山梨県環境科学検査センター……62
山梨県人会連合会……61
山梨日野自動車㈱……63
ユ
㈱ＵＧ都市建築……57
ユタカ電機㈱……53
ラ
ＲＵＳＴＹ，ｓ ＢＡＲ……62
ロ
㈱ロード……62
ワ
渡辺電業㈱……58

2019年
協賛者・協賛会社名（敬称略）

島田　敏男（Ｓ51卒）
新津　裕史（Ｓ52卒）
勝村　良一（Ｓ53卒）
田中　哲哉（Ｓ54卒）
奥秋　一俊（Ｓ56卒）
小澤　健司（Ｓ56卒）
後藤　照美（Ｓ56卒）
清水　慶一（Ｓ56卒）
㈲アサヒ工業
西部スチール㈱
㈱大栄興業
中央葡萄酒㈱

この他にもご協賛をいただきました。
本当にありがとうございました。

●令和元年度当番幹事（昭和56年卒）

幹事長	小田切 仁
副幹事長	末木 博／保坂 透
事務局	鷹野由香／大森智美／横内満里子／田中美恵
懇親会部会	保坂 透／神谷ひとみ
広告部会	末木 博／山口芳宏／町田泰樹／田中千穂／鷹野由香
日新鐘部会	刑部 聖／及川恵美／白倉優子／町田泰樹／山口芳宏／鷹野由香
一紅会	鷹野由香／神谷ひとみ／青柳きよみ／田中千穂／白倉優子
会計部会	菅野 悟／青柳きよみ／田中千穂
ＩＴ部会	向山敬介／渡辺 稔
甲府部会	中澤信二

●制作にご協力いただき、ありがとうございました。

《ごあいさつ》
東京同窓会 会長　清水 昭さん（昭和44年卒）
甲府第一高等学校 校長　小林俊一郎 先生

《甲府と東京をつないだ先輩 その１》
早稲田大学 創造理工学部 建築学科　山田 眞 教授
南アルプス市中央図書館
南アルプス市立櫛形中学校

《届かなかった甲子園》
甲府一高 野球部 監督　窪田 新さん（平成６年卒）

《今、一高で元気な部活！》
アーチェリー部 前顧問　吉成 謙 先生・顧問　花輪秀剛 先生
テニス部（男女）顧問　高鳥亮太 先生・永井勇太郎 先生
弓道部 顧問　大塚正敏 先生
水泳部 部長　西口克輝さん（２年１組）
ア・カペラ部 顧問　中 源博 先生
書道部 顧問　古屋彰士 先生
美術部 顧問　石田泰道 先生
箏曲部 部長　市川栞凪さん（３年１組）

《甲府と東京をつないだ先輩 その2》
山本順二さん（昭和41年卒）
茂手木光博さん（昭和40年卒）
金子 寛さん（昭和43年卒、甲府第一高等学校同窓会 事務局長）
富士川町スポーツミュージアム

《一高の一年》
総務広報主任　土屋浩之 先生（昭和56年卒）

《現役一高生への７つの質問！》
総務広報主任　土屋浩之 先生（昭和56年卒）
各学年各クラス担任の先生方
現役一高生のみなさん

《赤い蝶ネクタイの制服》
甲斐絹屋 社長　青柳健治さん

《甲府と東京をつないだ先輩 その3》
森山威男さん（昭和38年卒）
藤森 亨さん

《一紅会》
一紅会 会長　峯川文江さん（昭和44年卒）
一紅会 第３代会長　飯田冨美子さん（昭和33年卒）
ＩＡＥＡ事務局長特別補佐官　市川とみ子さん（昭和56年卒）
長野県立歴史館 館長　笹本正治さん（昭和45年卒）

編集後記

今こうしてこの原稿を書いているということは、記念誌の編集作業が無事に終わりつつあるということ。中学から甲府にきた僕には同級生にくらべ一高の先輩後輩についての知識はおろか同級生自体の情報も圧倒的に欠けていました。そんな自分に同窓会記念誌の編集長ができるのか？ でも、メンバーの発想と努力により大きな仕事は達成されました。作業の中でいちばん印象に残っているのは、まあよくもみんなで酒をいっぱい飲んだなということです。新しい友人をたくさんあたえてくれた東京同窓会と記念誌「日新鐘」に感謝！　（刑部 聖）

60回記念のシンボルマークは、メインテーマ の「カネノネ」です。響く鐘の音を５線で表現しました。今回数ヶ月に亘り記念誌制作に取り組んだことで、サブテーマ「心をつなぐ同窓の輪」を実感いたしました。心より感謝いたします。　（及川恵美）

同窓生や同郷の年代を超えた方々との繋がりを記念誌に携わり再認識できました。感謝いたします。同窓生寄稿の頁で日新ホールのチキンライス、前店、横店など皆さまの想い出を挿絵で描いたことも良い記念になりそうです。　（白倉優子）

取材で卒業から38年ぶりに母校の中に入りました。現役の後輩から気持ちの良い“こんにちは”という挨拶。その声だけでうるうるでした。聖火をつないだ先輩の取材では、お元気な姿を見て背筋が伸びもしました。出逢いをつないでくれた同窓会誌に感謝です。（町田泰樹）

甲府と東京をつないだ先輩の取材で早稲田大学に赴き、偉大な先輩の足跡に触れられ、又この編集を通じて、先輩方との縦の絆、まるで学園祭前の様に一緒に作業した同級生との横の絆を同時に実感する事が出来、全ての方々に感謝致します。　（山口芳宏）

十数年前、サブ幹事での出会いが「聖火ランナー」の記事へと繋がりました。取材を通して新たな繋がりも生まれ、とても実り多き時間でした。沢山の方々との出会い、そして協力の元に出来上がった「日新鐘」は宝物です。素晴らしい時間と出会いに感謝します。（鷹野由香）

誤解を恐れずに言えば、会社の社長にはなりたければなれるが、高校野球の監督にはそうなれるものではありません。窪田監督は人生の夢という監督に就任しました。それも母校。しかし彼から感じたのは選手に対しての責任の重さ、悩みの深さ。就任6年目を迎え、監督自身にも変化が生じているのかもしれない。インタビューを通じて、一高野球部の応援はもちろん、窪田監督の応援をしたいと思いました。東京同窓会の皆様、夏の山梨県大会甲府一高の試合にぜひとも足を運び、スタンドで校歌、応援歌を歌っていただきたく思います。（小田切 仁）

2019 甲府中学・甲府一高 東京同窓会 記念誌

日新鐘 VOL.26

発行日	2019年7月6日
発行者	甲府中学・甲府一高 東京同窓会
取材	日新鐘部会
本文編集	刑部 聖
表紙デザイン	及川恵美
印刷製本	株式会社 少國民社

実装基板インライン3DX線検査装置

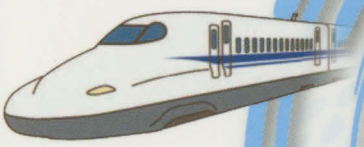
ILX-1100/2000

ILX-1100/2000は、半導体/電子部品実装基板のはんだ付け部をX線を用いて自動検査する、インラインタイプの検査装置です。

※X線ステレオ方式は、株式会社アイビットの登録商標です。

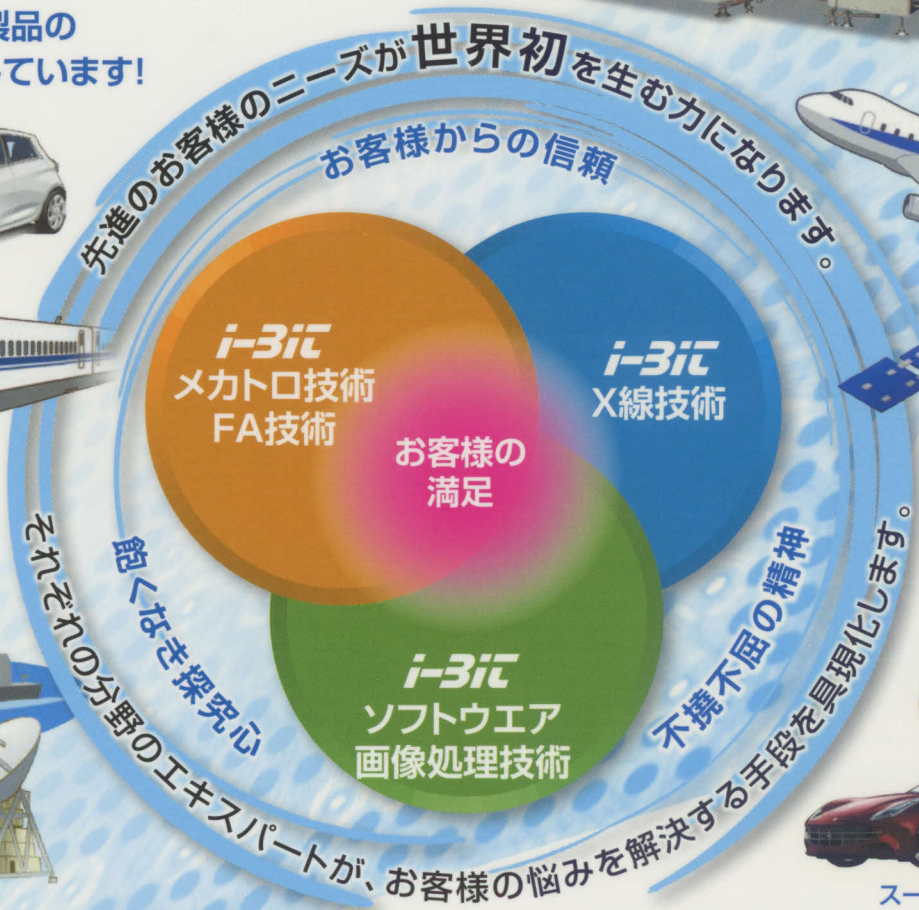
X線ステレオ方式®

身近な製品の
中身を検査しています!



最近話題の
人工衛星も!

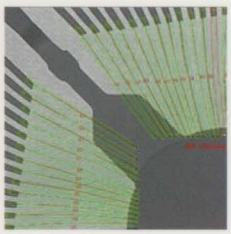
スーパーカーも!



IC/LEDワイヤーボンドX線自動検査装置

LFX-1000

LFX-1000は、モールドされた半導体部品のIC/LED内部のワイヤーボンド/リードフレームの状態を高速/高精度に検査します。



ウェーハバンプX線検査装置

Six-3000

Six-3000は、ウェーハ上のマイクロバンプの内部状態をX線を用いて透視検査する装置です。

●微小ウェーハバンプ検査
(φ30μmのバンプを自動検査)

KANAGAWA
HIGH-TECH.
GRAND-PRIX
神奈川工業技術開発大賞受賞

第62回 九都県市首脳会議「きらりと光る産業技術」受賞

首都圏の東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県の知事、政令指定都市の横浜市・川崎市・千葉市・さいたま市、相模原市の市長が長期的展望のもとに、優れた技術を「きらりと光る産業技術」として認定し、表彰する技術です。
http://www.9tokenshi-syunoukaigi.jp/

神奈川県優良小規模企業者受賞

i-Bit X-ray Imaging System
開発・設計・製造・販売
株式会社 アイビット
〒213-0012 神奈川県川崎市高津区坂戸3-2-1 かながわサイエンスパーク 東棟6F
TEL.044-829-0067 URL:http://www.i-bit.co.jp
代表取締役 向山 敬介 (昭和56年卒)